

K-580

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第87集

# 遺跡詳細分布調査報告書

## 第18集

住宅開発分布調査  
大規模開発関係分布調査  
館山C遺跡発掘調査  
米沢城跡確認調査  
京塚古墳群確認調査  
古館山古墳確認調査

2005

米沢市教育委員会

# 遺跡詳細分布調査報告書

## 第18集

住宅開発分布調査  
大規模開発関係分布調査  
館山C遺跡発掘調査  
米沢城跡確認調査  
京塚古墳群確認調査  
古館山古墳確認調査

2005

米沢市教育委員会



## 序 文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成16年度に、国庫補助事業として実施した「遺跡詳細分布調査」の成果をまとめたものです。

米沢市教育委員会は、埋蔵文化財の周知を図るため、遺跡詳細分布調査を平成元年から継続して実施しております。調査を重ねることは、歴史の解明と埋蔵文化財の周知につながります。

今年度の遺跡詳細分布調査で、宅地開発関係では館山C遺跡の発掘調査、京塚古墳の確認調査、また大規模開発に係る試掘調査等を実施しました。さらに、古館山古墳2基を新らに発見することができました。

本年度も調査の成果を上げることができましたことは、関係各位のご理解とご協力の賜ものと感謝申し上げるとともに、今後とも開発事業に対し、円滑な調整を図り、可能な限り力を注いでいく所存であります。

最後になりましたが、調査に際しご指導を賜りました文化庁、山形県教育庁社会教育課文化財保護室をはじめ、地権者各位並びに地元の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成17年3月

米沢市教育委員会

教育長 外田忠雄



## 例　　言

1 本報告書は、文化庁の補助を受けて実施した、平成16年度の遺跡詳細分布調査報告書である。

2 調査は米沢市教育委員会が実施した。

3 調査期間 平成16年4月7日から平成17年3月31日

4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 村野隆男（文化課長）

調査担当 手塚孝（文化課文化財担当主査）

調査主任 菊地政信（文化課主任）

月山隆弘（文化課主任）

調査補助員 笹川由紀

調査参加者 嵐田良晴 江袋吉男 遠藤力 大石勝夫 川村交右

木村昭一 神田陽一 小出久三 小林順子 近野慶子

齊藤幸弘 佐藤四郎 佐藤秀子 清水弘文 高橋正子

丸山忠俊 水野とも子 雪好輝 渡部惇

事務局長 山口弘子（文化課長補佐）

事務局 深瀬順子（文化課主査）

調査指導 文化庁・山形県教育庁社会教育課文化財保護室

5 挿図の縮尺は、第I節の第1～20図は1万分の1で、ドット部分が調査箇所である。第21～45図は5千分の1で、斜線部分が調査箇所である。

第II節～第IV節は、挿図毎にスケールで示した。第I節の挿図は上部が磁北を示しており、第II節～第IV節は各挿図に示した。挿図内の図化及び記号は、TY－柱穴、DY－土廣、P－ピット、FY－不明遺構、CY－配石遺構、AZ－土器、BZ－石器、HZ－陶磁器、T－トレンチを示す。遺物写真の縮尺は適宜行っている。

6 出土遺物は、米沢市埋蔵文化財資料室(米沢市万世町桑山269-3)に保管している。

7 本書の作成は、第I・III・V節が月山隆弘、第II・IV節は菊地政信、全体について手塚孝が総括した。

8 調査にあたって、根津良伸・佐藤進・金田八良・金松寺の各氏及び関係各位のご協力を得た。記して感謝申し上げます。

# 本文目次

## 序文

## 例言

### 第Ⅰ節 埋蔵文化財調査経過

1 開発に伴う遺跡の確認調査 .....	1
2 大規模・公共事業開発に伴う試掘調査 .....	1
3 試掘調査状況 .....	4

### 第Ⅱ節 館山C遺跡発掘調査

1 遺跡の概要 .....	25
2 調査に至る経過と調査の経過 .....	28
3 検出遺構 .....	30
4 出土遺物 .....	35
5 まとめ .....	39

### 第Ⅲ節 米沢城跡確認調査

1 遺跡の概要 .....	44
2 検出遺構 .....	44

### 第Ⅳ節 京塚古墳群確認調査

1 古墳の概要 .....	48
2 調査の経過 .....	50
3 調査の成果 .....	53
4 出土遺物 .....	56
5 まとめ .....	59

### 第Ⅴ節 古館山古墳確認調査

1 遺跡付近の環境と概要 .....	70
--------------------	----

報告書抄録 .....	72
-------------	----

# 附表目次

表-1 分布調査箇所 .....	2
表-2 公共事業関連分布調査箇所 .....	3
表-3 大規模開発分布調査箇所 .....	3
表-4 置賜地域の古墳編年表 .....	68
表-5 山形県の前方後円（方）墳 .....	69

## 挿 図 目 次

第1図 館山平城跡位置図	4
第2図 大浦B遺跡位置図	4
第3図 台坂遺跡位置図	4
第4図 館山C遺跡位置図	5
第5図 中の目遺跡位置図	5
第6図 花沢b遺跡位置図	5
第7図 荒屋遺跡位置図	6
第8図 台ノ上遺跡位置図	6
第9図 緑返原遺跡位置図	6
第10図 上新田C遺跡位置図	7
第11図 上谷地B遺跡位置図	7
第12図 花沢A遺跡位置図	7
第13図 館山d遺跡位置図	8
第14図 通町跡位置図	8
第15図 萩ノ森遺跡位置図	8
第16図 中谷地a遺跡位置図	9
第17図 生蓮寺遺跡位置図	9
第18図 霊田荒館跡位置図	9
第19図 下之町a遺跡位置図	10
第20図 米沢城跡位置図	10
第21図 花沢a・b遺跡調査区位置図	11
第22図 台坂・下花沢a遺跡調査区位置図	12
第23図 下花沢b遺跡調査区位置図	13
第24図 館ノ内C遺跡調査区位置図	13
第25図 米沢城跡調査区位置図	14
第26図 下花沢a遺跡調査区位置図	14
第27図 矢来調査区位置図	15
第28図 三沢字白旗調査区位置図	15
第29図 東調査区位置図	16
第30図 八幡原調査区位置図	16
第31図 金池調査区位置図	17
第32図 直江町調査区位置図	17
第33図 成島町調査区位置図	18

第34図 塩井町調査区位置図	18
第35図 李山調査区位置図	19
第36図 広幡町調査区位置図	19
第37図 万世町調査区位置図	20
第38図 堀川町調査区位置図	20
第39図 成島町調査区位置図	21
第40図 塩井町調査区位置図	21
第41図 六郷町調査区位置図	22
第42図 万世町調査区位置図	22
第43図 万世町調査区位置図	23
第44図 太田町調査区位置図	23
第45図 塩井町調査区位置図	24
第46図 館山C 遺跡調査箇所位置図	26
第47図 館山C 遺跡遺構全体図	27
第48図 館山C 遺跡堀立建物跡平面図 (BY 1・2・3)	29
第49図 館山C 遺跡遺構平面図 (DY2・7)	31
第50図 館山C 遺跡遺構平面図 (f Y 1・8・9)	32
第51図 館山C 遺跡遺構平面図 (f Y 6・10・11・14)	34
第52図 館山C 遺跡遺構平面図 (TY 1・4・21・23・26~29・31・P48)	36
第53図 館山C 遺跡出土遺物拓影図	38
第54図 館山C 遺跡出土遺物実測図 (石器・礫器)	40
第55図 館山C 遺跡出土遺物実測図 (瓦器・陶磁器)	41
第56図 館山C 遺跡出土遺物実測図 (摺鉢)	42
第57図 米沢城跡位置図	45
第58図 米沢城跡付近位置図	46
第59図 米沢城跡配石遺構平面図	47
第60図 京塚古墳群位置図	49
第61図 京塚古墳群・成島古墳群分布図	51
第62図 京塚古墳群 4号墳トレンチ配置図	52
第63図 京塚古墳群前方部遺物出土点図	54
第64図 京塚古墳群 4号墳後円部遺物出土点図	55
第65図 京塚古墳群 4号墳トレンチセクション図(1)	57
第66図 京塚古墳群 4号墳トレンチセクション図(2)	58
第67図 京塚古墳群 4号墳トレンチセクション図(3)	60
第68図 京塚古墳群 4号墳トレンチセクション図(4)	61

第69図	京塚古墳群4号墳主体部トレンチセクション図	62
第70図	京塚古墳群4号墳出土遺物実測図	63
第71図	置賜地域の中・後期古墳分布図	64
第72図	成島1号墳・戸塚山139号墳測量図	65
第73図	京塚4号墳・小森山61号墳測量図	66
第74図	古館山古墳周辺位置図	71

## 図 版 目 次

- 図版1 舘山C遺跡（発掘前風景・遺構全景）
- 図版2 舘山C遺跡（FY1近景・FY7土セクション状況）
- 図版3 舘山C遺跡（TY1半裁状況・TY33半裁状況・TY3半裁状況）
- 図版4 舘山C遺跡（TY18半裁状況・TY6半裁状況・TY17半裁状況）
- 図版5 舘山C遺跡（遺構全景・DY2セクション状況・出土遺物）
- 図版6 米沢城跡（配石遺構）
- 図版7 京塚古墳（京塚4号墳全景・後円部の南東地区調査風景）
- 図版8 京塚古墳（Aトレンチセクション状況・Eトレンチセクション状況）
- 図版9 京塚古墳（Iトレンチ掘り下げ状況・前方部西端部Cトレンチ掘り下げ状況）
- 図版10 京塚古墳（Gトレンチセクション状況・Eトレンチセクション状況全景）
- 図版11 京塚古墳（Aトレンチセクション状況・Fトレンチセクション状況）
- 図版12 京塚古墳（後円部西側調査風景・Iトレンチ掘り下げ状況）
- 図版13 京塚古墳（Sトレンチ掘り下げ状況・Jトレンチ掘り下げ状況）
- 図版14 京塚古墳（前端部トレンチ遺物出土状況・同上近景）
- 図版15 京塚古墳（Qトレンチ調査区遺物出土状況・Rトレンチ整地層出土の炭化物）
- 図版16 京塚古墳（Uトレンチ掘り下げ状況遠景・Uトレンチ近景）
- 図版17 京塚古墳（Uトレンチ遺物出土状況・Uトレンチ遺物出土状況近景）
- 図版18 舘山C遺跡・京塚古墳（出土遺物・出土遺物）



## 第1節 埋蔵文化財調査経過

### 1 開発に伴う遺跡の確認調査

平成16年度、本市教育委員会に住宅開発等によって、埋蔵文化財に係わることから、協議や分布調査等の確認依頼を受けたのは、平成17年3月25日現在で69件であった。

特に今年度は、土地及び建物の売買に係る埋蔵文化財包蔵地の確認依頼が顕著であり、また携帯電話の無線基地の建設に伴う確認依頼も多くあった。この中で、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）及び包蔵地以外を含め、試掘調査、立会い調査、現地確認調査を実施した内訳は下記のとおりである。

(1) 住宅建設に係わるもの	25件	(2) 店舗・事務所建設に係わるもの	4件
(3) 工場・倉庫等に係わるもの	2件	(4) 砂利採取に係わるもの	1件
(5) 宅地開発等に係わるもの	2件	(6) その他の開発等に係わるもの	7件
(7) 公共事業等に係わるもの	7件		

この中で試掘調査（立会い調査含）を実施したのは57件あり、種別としては例年と同様、住宅開発に係わるのが大半を占めており、次いでその他の開発、公共事業等に係わるものであった。上記の分布調査の概要は、大規模開発と区別し調査箇所・調査月日・開発種別・調査方法を表-1の分布調査箇所に一括し、遺跡位置図と調査地点を第1～20図にまとめた。

今年度の分布調査によって遺構・遺物等が確認されたため、発掘調査に至ったのは、個人住宅関係の館山C遺跡があり第II節で記述する。また米沢城跡では、参道舗装事業の開発に係り配石遺構が検出されたことから測量調査を実施したのは第III節で、確認調査を実施した京塙古墳群については第IV節でそれぞれ報告する。

農林関係の事業では、長手・川井地区の赤松が、松くい虫の被害を受けたことによる、伐採作業を行なうため、当付近の遺跡の空白地に未確認の古墳等が遺存することが予想され、これらの作業によって崩壊することが懸念され、長手地区、木和田古墳付近の踏査を実施した。この踏査において2基の新規古墳が確認された状況は第V節で報告する。

### 2 大規模・公共事業開発に伴う試掘調査

本市教委では、遺跡の周知徹底を図るために遺跡の有無に係らず、開発面積が1,000m<sup>2</sup>以上を大規模開発と内規しており、開発者に分布調査依頼書を提出していただき、事前調査を実施している。今年度、大規模開発には19件の分布調査依頼がありその内訳は、宅地造成が7件、その他の開発が4件、店舗・事務所及び砂利採取がそれぞれ3件、工場・倉庫に係わるものが2件であった。この中で過去に隣接する試掘調査結果等から、旧河川跡等と判断されることから現地確認調査のみで対処した箇所が9件あった。

以上、大規模開発に係る試掘調査の概要は、表-3の大規模開発分布調査箇所に一括し、位置図と調査箇所を第27～52図にまとめた。

公共事業における包蔵地の開発については、下水道・水路等の開発であるため、事前に試掘調査を実施することが困難であることから、全て立会いでの調査を実施した。表-2大規模開発分布調査箇所を第21～26図にまとめた。

表-1 包蔵地内分布調査箇所

No	遺跡名	調査箇所	調査月日	種別	調査方法	備考
1	米沢城	松が岬2丁目3141-1	4月5日	店舗兼個人住宅	トレンチ	2m×10m 2本
2	館山平城	館山1丁目1-146	4月13日	個人住宅	トレンチ	1m×8m 2本
3	大浦B	中田町548-2	4月16日	店舗	トレンチ	2m×10m 2本
4	台坂	下花沢3丁目1736-1外	4月16日	個人住宅	トレンチ	1m×6m 外5本
5	館山C	館山6丁目1539-1外	4月23日	個人住宅	トレンチ	2m×5m 3本
6	米沢城	城南2丁目2-20	4月23日	集合住宅	トレンチ	2m×8m 10本
7	中の目	大字梓川字道上730	5月11日	個人住宅	トレンチ	1.5m×20m 2本
8	台坂	下花沢1746	5月13日	個人住宅	トレンチ	1m×15m 2本
9	米沢城	門東町2丁目3042-4	5月18日	個人住宅	トレンチ	1m×10m 2本
10	花沢b	駅前3丁目地内	5月27日	宅地造成	トレンチ	2m×10m 11本
11	荒屋	大字竹井1526	5月31日	個人住宅	トレンチ	1m×18m 外1本
12	米沢城	丸の内1丁目3104-22外	6月8日	個人住宅	トレンチ	1m×13m 外1本
13	台ノ上	吾妻町53外	6月8日	堆肥施設	現地確認	
14	縁返原	大字李山10221-35	6月10日	個人住宅	トレンチ	1m×10m 外1本
15	上新田C	大字上新田445	6月17日	個人住宅	トレンチ	1m×15m 2本
16	上谷地B	大字川井字上谷地512-4外	6月17日	個人住宅	トレンチ	1m×8m 2本
17	米沢城	城南1丁目639外	6月17日	宅地造成	トレンチ	1.5m×30m 2本
18	花沢A	花沢町1丁目2616-3外	7月20日	個人住宅・社屋	トレンチ	2m×15m 6本
19	米沢城	城南3丁目105-12	7月20日	個人住宅	トレンチ	1m×10m 外1本
20	館山d	館山6丁目1661-1	7月27日	倉庫	トレンチ	1m×2m 2本
21	米沢城	城南1丁目5-4	8月3日	個人住宅	トレンチ	1m×7m 外3本
22	花沢a	花沢町1丁目2509-2外	8月10日	個人住宅	トレンチ	
23	通町	通町7丁目8767-2	8月23日	個人住宅	トレンチ	1m×14m 外2本
24	萩の森	大字上新田字千刈原92	8月25日	個人住宅	トレンチ	1m×10m 外1本
25	米沢城	城南3丁目1-48	8月30日	事務所	トレンチ	1m×11m 外1本
26	中の目	大字梓川836外	9月2日	土砂採取	トレンチ	2m×11m 外1本
27	荒屋	大字竹井字荒屋1737-1	9月2日	個人住宅	トレンチ	2m×10m 6本
28	中谷地a	大字竹井字荒屋1523-4	9月2日	個人住宅	トレンチ	1m×9m 外1本
29	生蓮寺	館山1丁目3-11	9月2日	個人住宅	トレンチ	1m×13m 外1本
30	生蓮寺	館山1丁目6428-1	9月7日	個人住宅	トレンチ	1m×10m 外1本
31	米沢城	門東町1丁目664-34	9月21日	集合住宅	トレンチ	1m×11m 外2本
32	米沢城	城南3丁目4798	10月19日	集合住宅	トレンチ	4m×6m 2本
33	台坂	下花沢2丁目1843-1	10月22日	個人住宅	トレンチ	2m×25m 2本
34	米沢城	丸の内1丁目4747-2外	10月27日	個人住宅	トレンチ	4m×5m 2本
35	塙田町荒館	塙田町塙田地内	11月12日	工場	トレンチ	2m×20m 2本
36	米沢城	丸の内1丁目3049-4外	11月15日	集合住宅	トレンチ	0.6m×0.6m 外1本
37	米沢城	丸の内1丁目3104-20外	11月19日	旅館	トレンチ	2m×14m 外1本
38	花沢A	駅前4丁目2318	12月6日	個人住宅	トレンチ	2m×20m 2本
39	下之町a	大字口田沢字中町	12月14日	無線基地	トレンチ	2m×15m 6本

No	遺跡名	調査箇所	調査月日	種別	調査方法	備考
40	米沢城	城南2丁目157-3外	12月24日	個人住宅	レンチ	2m×5m 2本
41	米沢城	門東町1丁目83-2	H17年2月7日	店舗	レンチ	1.5m×9m 外3本
42	今後の予定					
43	花沢 b	駅前4丁目2318	H17年3月22日	個人住宅	レンチ	2m×3m 2本
44	通町	通町7丁目8668外	H17年 月 日	個人住宅	レンチ	m× m 本
45	台坂	下花沢3丁目1801-1	H17年 月 日	個人住宅	レンチ	m× m 本

表-2 公共事業関連分布調査箇所

No	遺跡名	調査箇所	調査月日	種別	調査方法	備考
1	下花沢 a	下花沢2丁目110-1外	4月 5日	側溝	立会い	1m×66m 外1本
2	花沢a・b	駅前3丁目1822外	6月16日外	下水道	立会い	1.25m×1130m 外4本
3	下花沢b	下花沢1丁目7599外	7月21日外	下水道	立会い	1.1m×520m 外
4	台坂・下花沢a	下花沢3丁目1860-4外	8月27日外	下水道	立会い	1.1m×800m 外
5	館ノ内C遺跡	鎌野本町字館ノ内6859外	11月10日	側溝	立会い	2m×66m 1本
6	米沢城	丸の内1丁目地内	11月24・25日	参道舗装	グリット	6m×99.5m 1本
7	米沢城	丸の内1丁目地内	12月15日	蔵	レンチ	2m×8m 1本
8						
9						
10						

表-3 大規模開発分布調査箇所

No	遺跡名	調査箇所	調査月日	種別	調査方法	備考
1	該当なし	矢来3丁目地内	4月 1日	宅地造成	レンチ	2m×15m 3本
2	該当なし	大字三沢字白旗地内	5月27日	倉庫	レンチ	1.5m×8m 外11本
3	該当なし	東2丁目8067-1外	6月 3日	宅地造成	レンチ	1.5m×8m 外5本
4	該当なし	徳町408外	5月 7日	老人施設	現地確認	
5	該当なし	塙井町塙野字町畠下48-2	5月20日	宅地造成	レンチ	2m×10m 16本
6	該当なし	八幡原1丁目1-20	6月28日	工場	現地確認	
7	該当なし	金池5丁目13-3外	7月 5日	店舗	現地確認	
8	該当なし	直江町4-12	7月30日	職員宿舎	レンチ	2m×10m 9本
9	該当なし	成島2丁目地内	8月 3日	店舗	現地確認	
10	該当なし	塙井町塙野字川辺南3427外	8月25日	砂利採取	現地確認	
11	該当なし	大字李山字御入水西3675-5外	9月15日	リサイクル施設	現地確認	
12	該当なし	広幡町小山田1183-1外	10月 7日	砂利採取	現地確認	
13	該当なし	万世町金谷287-1外	10月25日	店舗・住宅	現地確認	
14	該当なし	堀川町・林泉寺2丁目地内	10月27日	宅地造成	レンチ	2m×10m 外14本
15	該当なし	成島町2丁目地内	11月16日	宅地造成	レンチ	2m×10m 20本
16	該当なし	塙井町塙野字荒川上755-2外	11月19日	集合住宅	レンチ	2m×20m 外3本
17	該当なし	六郷町字森3427外	12月 日	砂利採取	現地確認	
18	該当なし	万世町桑山地内	12月 日	宅地造成	レンチ	2m×10m 外13本

## 1 館山平城跡

本遺跡は、市街地西方約3kmに位置し、標高約260mに所在する。当該地西方1.5kmには、標高約330mの館山城跡が分布する。遺跡は東西1.2km、南北1kmに分布する中世の遺跡である。遺跡範囲には数箇所の縄文の遺跡が含まれている。

届出は1件で、個人住宅の建設に伴うものである。当該地に2m×8mのトレンチを2本設定し調査した結果、表土下約60cmが黄褐色シルトの地山層であった。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第1図 館山平城跡位置図

## 2 大浦B遺跡

本遺跡は、市街北方2kmに位置し、標高236mに所在する。遺跡は東西200m、南北400mに分布する奈良・平安時代の遺跡である。遺跡範囲の西側では、方形で区画された柵列が確認されており官衙跡と判断されている。

届出は1件で、店舗の建設に伴うものである。当該地に2m×10mのトレンチを2本設定し調査した結果、表土下約1mと起伏がある茶褐色粘土質の地山層が確認された。しかし、当該地には既存の建物があったことから、地山層は擾乱している部分もあり遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第2図 大浦B遺跡位置図

## 3 台坂遺跡

本遺跡は、JR米沢駅東側約200mに位置し、最上川の河岸段丘の標高244mに所在する。東西400m、南北650mに分布する縄文時代の遺跡である。

届出は3件あり、3件ともに個人住宅に伴うものである。当該地にA～Cには、それぞれ2～6本のトレンチを設定し調査した結果、表土下30～50cmで、黄褐色シルトの地山層が確認された。3箇所からは遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第3図 台坂遺跡位置図

#### 4 館山C遺跡

本遺跡は、市街地西方約3kmに位置し、標高約269mに所在する。縄文時代の中期から晩期までの遺跡である。すぐ西側を流れる大樽川の西方には、標高約330mの館山城跡が存在する。遺跡は東西710m、南北750mに分布する中世の館跡である。

届出は1件で、個人住宅の建設に伴うものである。当該地に2m×5mのトレンチを3本設定し調査した結果、表土下50cmが黄褐色シルトの地山層であった。地山層からは、縄文時代と推定される土壙のプランや中世期の柱穴等が確認された。また遺物として、縄文土器と石器片が20数点の出土があった。これらの状況を開発者に告げ、協議した結果、発掘調査に至った。

#### 5 元立遺跡

本遺跡は、市街地西方約4kmに位置し、標高240mに所在する。遺跡は東西300m、南北500mに分布する奈良・平安、中世の遺跡である。

届出は2件で、個人住宅の建設と土砂採取に伴うものである。Aは1.5m×20mのトレンチを2本、Bはトレンチ2m×10mを6本設定し調査した結果、A・Bともに表土下40~50cmで、青灰色微砂質土及び茶褐色粘土質シルト及び地山層が確認された。2箇所からは造構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。

#### 6 花沢b遺跡

本遺跡は、JR米沢駅西側の駅前3・4丁目に位置し、最上川の河岸段丘の微高地、標高250mに所在する。東西200m、南北300mに分布する縄文中期の遺跡である。

届出は1件で、宅地造成に伴うものである。当該地に2m×10mのトレンチを11本設定し調査した結果、表土下40~60cmで、茶褐色シルトの地山層が確認された。造構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第4図 館山C遺跡位置図



第5図 中の目遺跡位置図



第6図 花沢b遺跡位置図

## 7 荒屋遺跡

本遺跡は、市街地東北5kmに位置し、標高235mに所在する。遺跡は東西600m、南北500mに分布する奈良・平安、中世の遺跡である。

届出は2件で、個人住宅の建設に伴うものである。当該地に1m×9·18mのトレンチを2本設定し調査した結果、表土下40cmで、茶褐色及び灰青色微砂質・茶褐色粘土質シルトの地山層が確認された。1件については、既存の建物によって地山層は攪乱していた。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第7図 荒屋遺跡位置図

## 8 台ノ上遺跡

本遺跡は、市街地南3kmに位置し、吾妻町地内の、最上川によって形成された河岸段丘の微高地、標高263mに所在する。東西250m、南北750mに分布する縄文中期の遺跡である。

届出は1件で、堆肥施設の建設に伴うものである。当該地の現地確認した結果、開発予定地は当委員会で、平成12年度から平成17年度までの予定で継続調査を実施している南側に隣接しており、明らかに遺跡が存在することと判断されることから、開発予定者と当委員会が協議し発掘調査に至った。この調査報告は平成17年度に刊行予定の台ノ上遺跡調査報告書で行いたい。

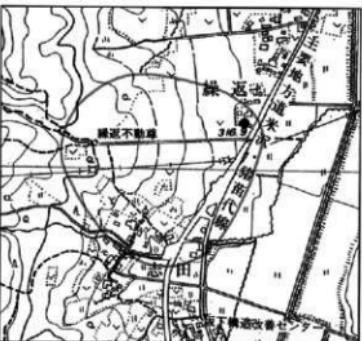


第8図 台ノ上遺跡位置図

## 9 緑返原遺跡

本遺跡は、市街地南方約6km大字李山地内に位置し、標高317mに所在する。東西400m、南北400mに分布する縄文前期の遺跡である。当遺跡の南側には縄文時代の志田遺跡及び坂下遺跡等が分布する。

届出は1件で、個人住宅に伴うもので、当該地の中央部に1m×10mのトレンチ外1本を設定し調査した。その結果、表土下60cmが黄茶褐色粘土の地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第9図 緑返原遺跡位置図

## 10 上新田C遺跡

本遺跡は、市街地北東約4kmに位置し、戸塚山古墳群の南側、水田地帯の標高257mに所在する。東西200m、南北600mに分布する奈良・平安・中世の遺跡である。当該地付近には奈良・平安の遺跡が密集し分布している。

届出は1件で、個人住宅に伴うものである。当該地に1m×15mのトレンチを2本設定し調査した結果、表土下30~40cmで、黄褐色粘土の地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかつたが、念のため慎重工事を指示した。



第10図 上新田C遺跡位置図

## 11 上谷地B遺跡

本遺跡は、市街地北西方約3kmに位置し、県立工業高等学校廻東側、標高約246mに所在する。遺跡は東西200m、南北300mに分布する縄文・古墳・中世の複合遺跡である。遺跡範囲には数箇所の縄文の遺跡が含まれている。

届出は1件で、個人住宅建設に伴うものである。当該地に1m×8mのトレンチを2本設定し調査した結果、表土下60cmで、茶褐色シルトの安定した地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかつたが、念のため慎重工事を指示した。



第11図 上谷地B遺跡位置図

## 12 花沢A遺跡

本遺跡は、JR米沢駅北東側400mに位置し、標高約250mに所在する。遺跡は東西400m、南北500mに分布する縄文中期・後期の遺跡である。当遺跡付近には数箇所の縄文の遺跡が存在する。

届出は3件あり、Aは個人住宅併用社屋、Bは個人住宅、Cは事務所に伴うものである。当該地にAは2m×15mを6本、Bは1m×14mの外2本、Cは1.5m×17mを2本のトレンチを設定し調査した結果、それぞれ表土下50~80cmで、茶褐色・黄褐色・黒褐色シルトの地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかつたが、念のため慎重工事を指示した。

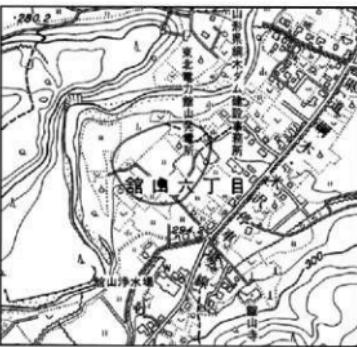


第12図 花沢A遺跡位置図

### 13 館山d遺跡

本遺跡は、市街地西方約3kmに位置し、標高約294mに所在する。縄文時代の中期から晩期までの遺跡である。すぐ南側には館山e、北側には館山cの縄文の遺跡が分布している。

届出は1件で、倉庫の建設に伴うものである。当該地に1m×7mのトレンチ外3本を設定し調査した結果、表土下80cmが砂利層の地山層であった。地山層から判断すると、当該地は池状の湿地があり、それを埋め立てた跡と推測される。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第13図 館山d遺跡位置図

### 14 通町遺跡

本遺跡は、万世町片子地内のJR米沢駅南側約2kmに位置し、最上川の河岸段丘の標高256mに所在する。東西250m、南北350mに分布する縄文の遺跡である。

届出は1件で、個人住宅に伴うものである。当該地に1m×10mのトレンチ外1本を設定し調査した結果、表土下50cmで、茶褐色シルトの地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。

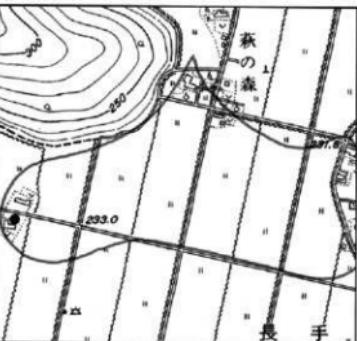


第14図 通町遺跡位置図

### 15 萩の森遺跡

本遺跡は、市街地北東約4kmに位置し、戸塚山古墳群東側斜面の水田地帯、標高233mに所在する。東西800m、南北300mに分布する奈良・平安・中世の遺跡である。当該地付近には奈良・平安の遺跡が密集し分布している。

届出は1件で、個人住宅に伴うもので、当該地に1m×11mのトレンチ外1本を設定し調査した結果、表土下70cmで、暗褐色シルトの地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第15図 萩の森遺跡位置図

## 16 中谷地 a 遺跡

本遺跡は、市街地北東5kmに位置し、標高238mに所在する。遺跡は東西150m、南北300mに分布する平安、中世の遺跡である。北側にすぐ隣接して奈良・平安時代の荒屋遺跡が分布する。

届出は1件で、個人住宅の建設に伴うもので、当該地に1m×13mのトレンチ外1本を設定し調査した結果、表土下40cmで、青灰褐色微砂質の地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



第16図 中谷地 a 遺跡位置図

## 17 生蓮寺遺跡

本遺跡は、館山一丁目地内の米沢城跡南西側400mに位置し、標高261mに所在する。東西200m、南北250mに分布する縄文（前期・中期）、中世の遺跡である。

届出は2件で、A・Bともに個人住宅に伴うものである。当該地にAは1m×10m外1本、Bは1m×11mのトレンチ外2本設定し調査した結果、表土下40~60cmで、黄褐色シルトの安定した地山層が確認された。しかし、Bは既存の建物があったことから地山層の一部は攪乱していた。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。

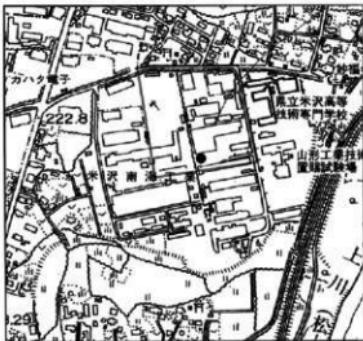


第17図 生蓮寺遺跡位置図

## 18 窪田町荒館跡

本遺跡は、市街地北側5kmに位置し、窪田町工業団地内に標高223mに所在する。東西200m、南北200mの方形に分布する中世の館跡である。当館北側には窪田下前田館、南側には小倉屋敷・川原屋敷・御行屋敷等の館跡が多く分布する地域である。

届出は1件で、工場の増設に伴うものである。当該地に2m×15mのトレンチを2本設定し調査した結果、表土下50cmが茶褐色シルトの地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。

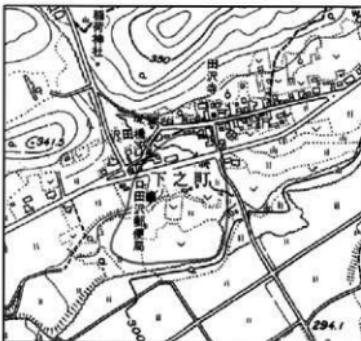


第18図 窪田荒館跡遺跡

## 19 下之町a遺跡

本遺跡は、市街地西南7kmに位置し、標高238mに所在する。遺跡は東西200m、南北250mに分布する縄文の遺跡である。東側に隣接して下之町a遺跡が分布する。

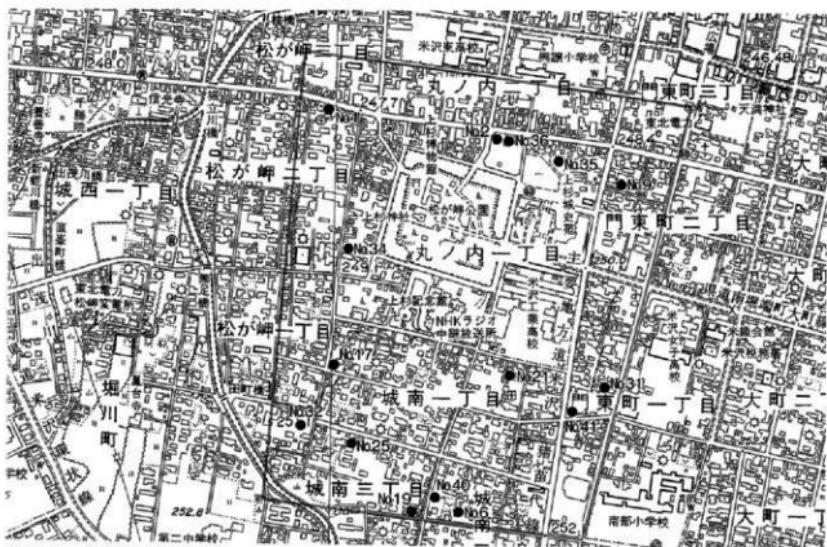
届出は1件で、携帯電話無線基地の建設に伴うものである。当該地に1.5m×12mのトレンチを3本を設定し調査した結果、表土下50cmで、黄褐色シルトに多量の砂利を含む地山層が確認された。遺構・遺物等は検出されなかったが、念のため慎重工事を指示した。



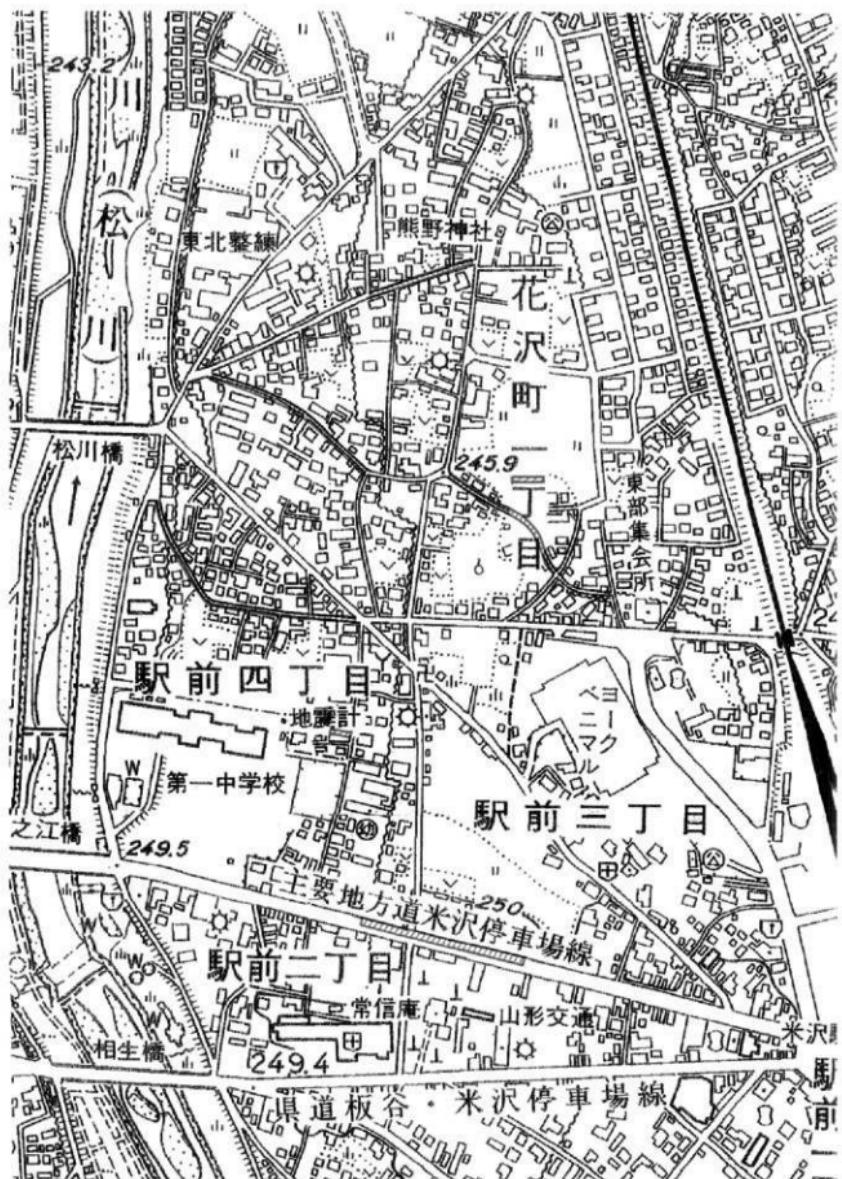
第19図 下之町a遺跡位置図

## 20 米沢城跡

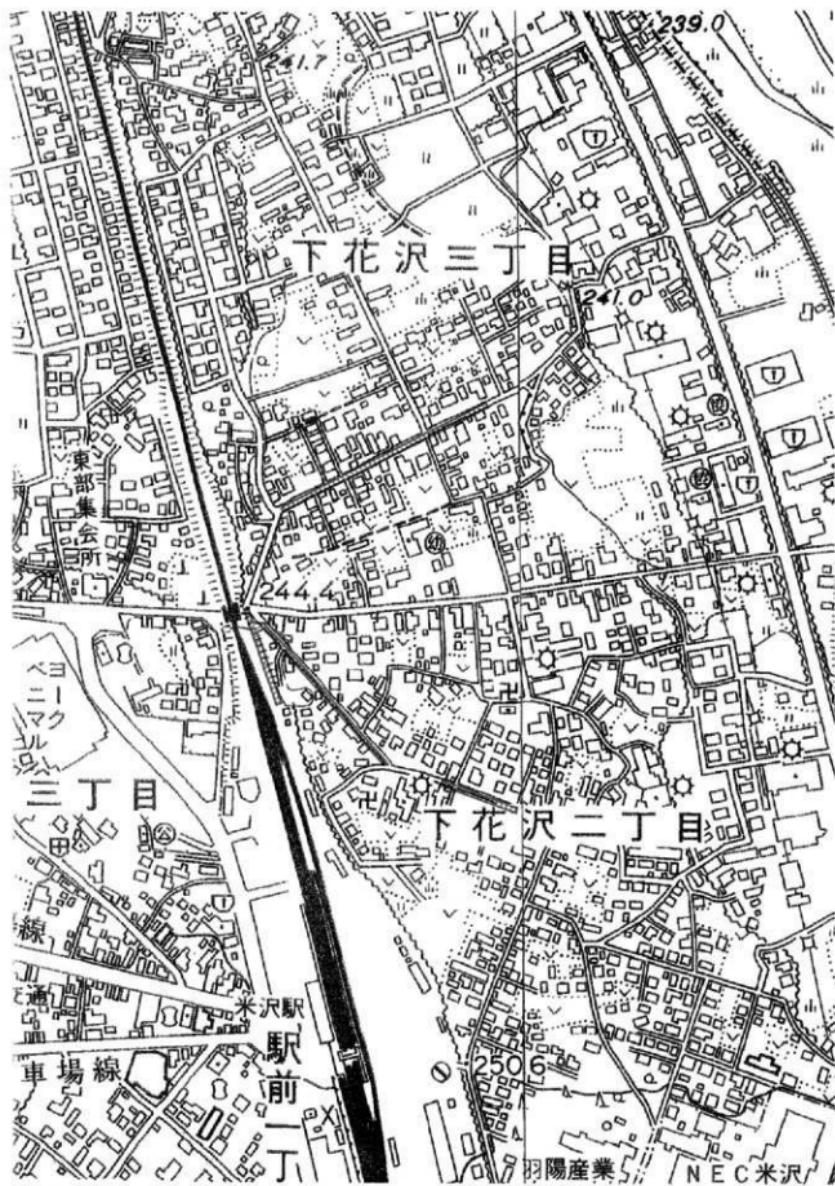
当該地には15件の届出があり、開発行為には個人住宅が6件と一番多く、次いで集合住宅が4件、事務所が2件、外各1件であった。当遺跡のトレンチ調査での地山層は、表土下50~80cmが茶褐色及び黒褐色粘土質シルト層であった。また、共通して確認されたことは、地山層上部は攪乱している整地層になっており、殆どの箇所で焼土や炭化物が含まれていることである。これらは米沢城付近の火災により整地したものと考えられる。全ての調査箇所で、遺構・遺物等は検出されなかったことから、慎重工事を指示した。



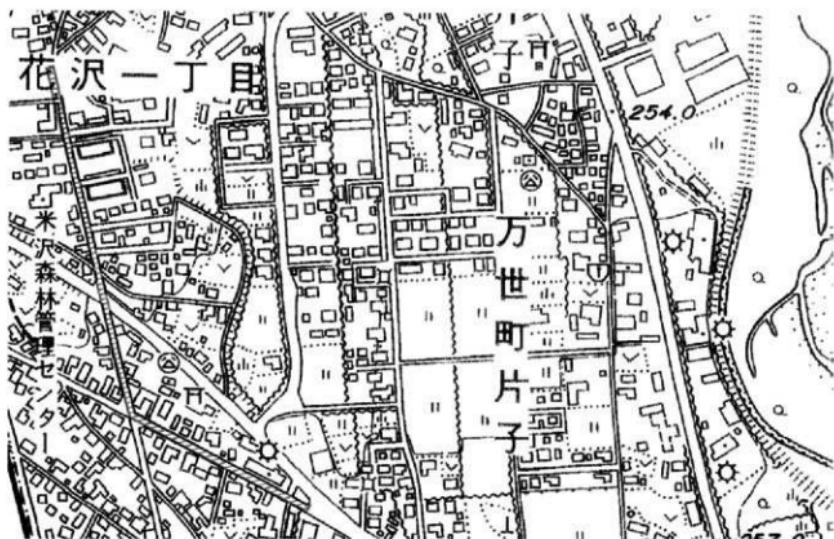
第20図 米沢城跡位置図



第21図 花沢a・b遺跡調査区位置図



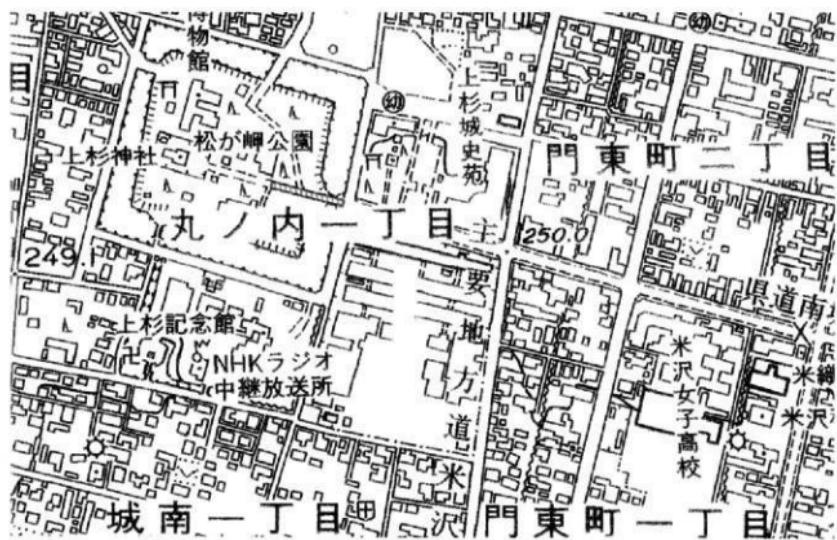
第22図 台坂・下花沢a遺跡調査区位置図



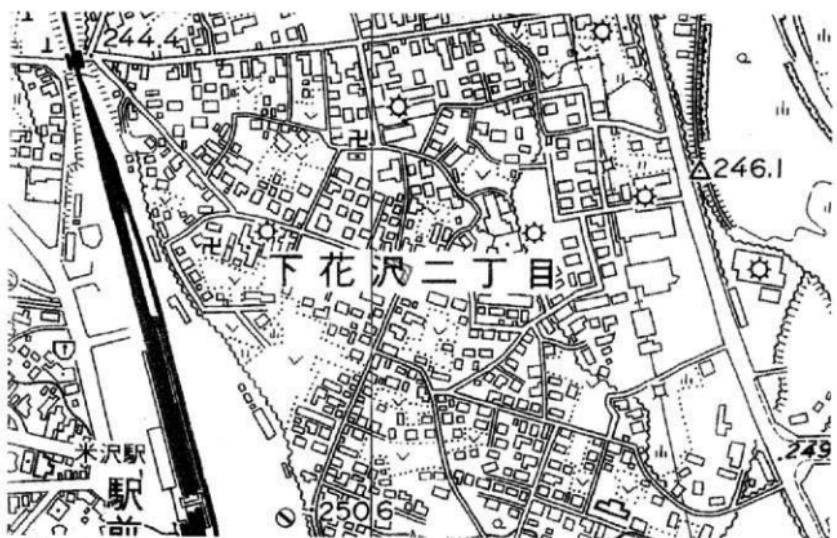
第23図 下花沢b遺跡調査区位置図



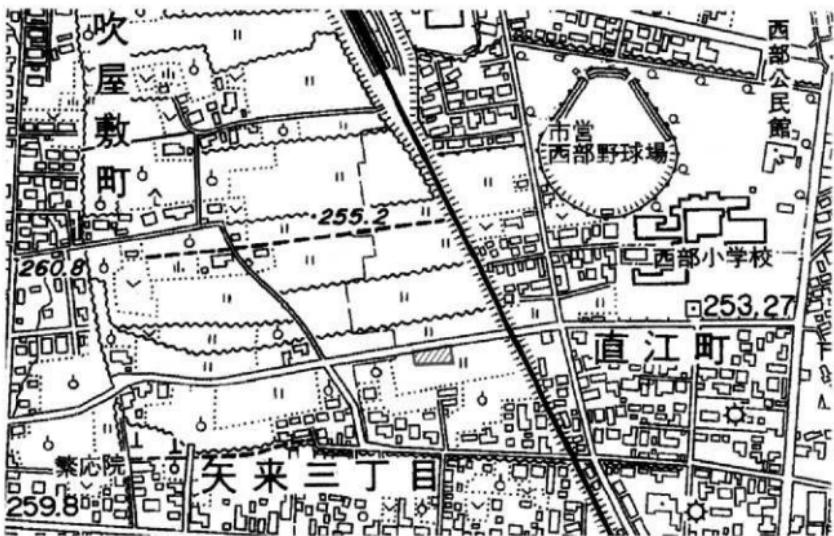
第24図 館ノ内C遺跡調査区位置図



第25図 米沢城跡調査区位置図



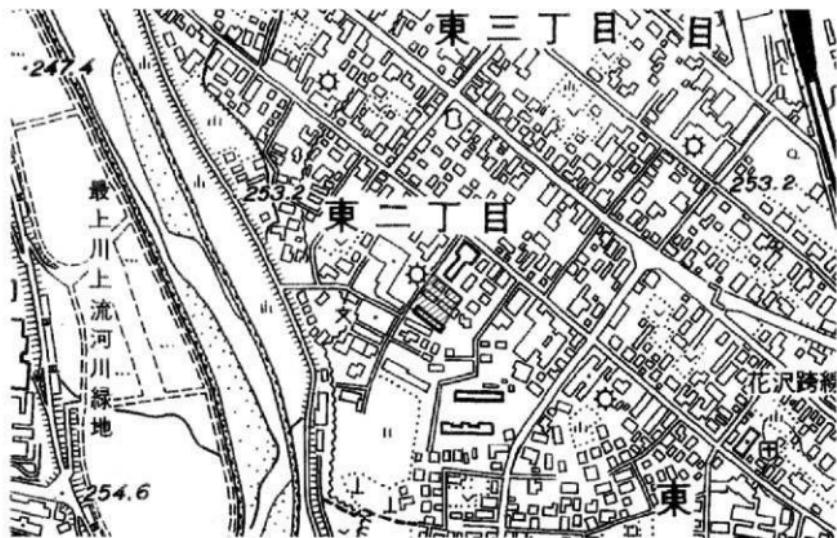
第26図 下花沢a遺跡調査区位置図



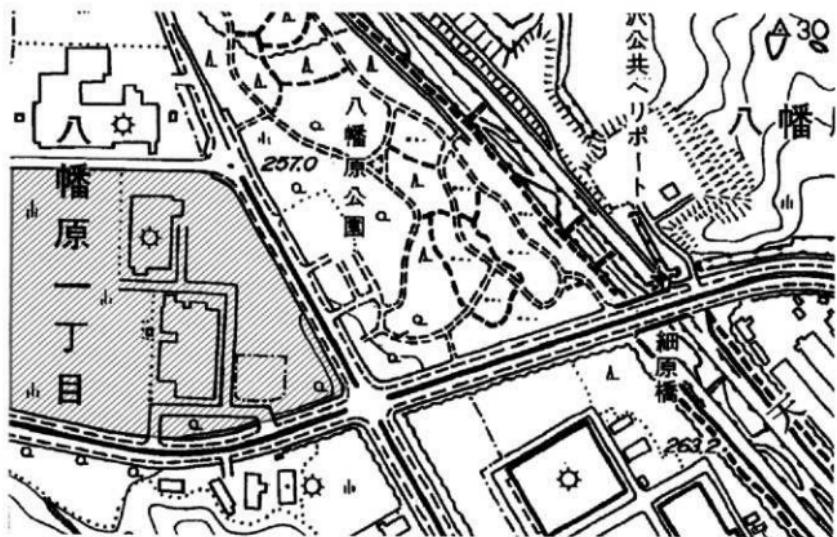
第27図 矢来調査区位置図



第28図 三沢字白旗調査区位置図



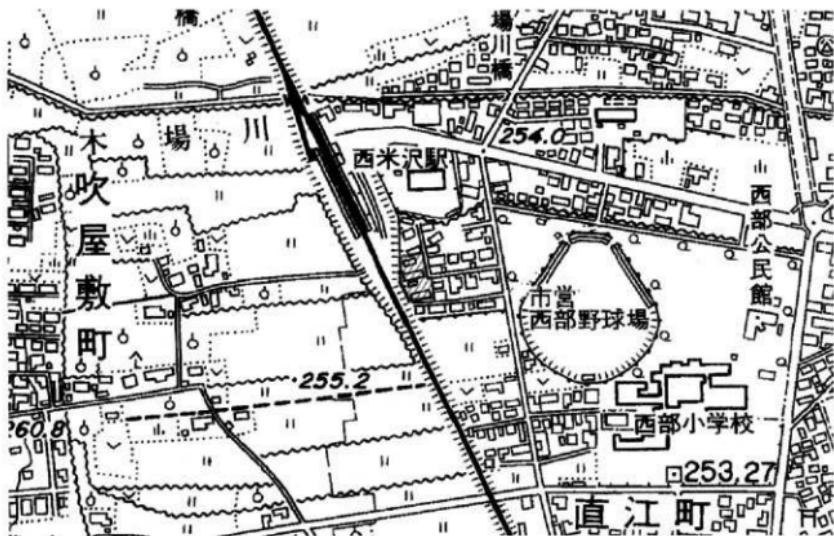
第29図 東調査区位置図



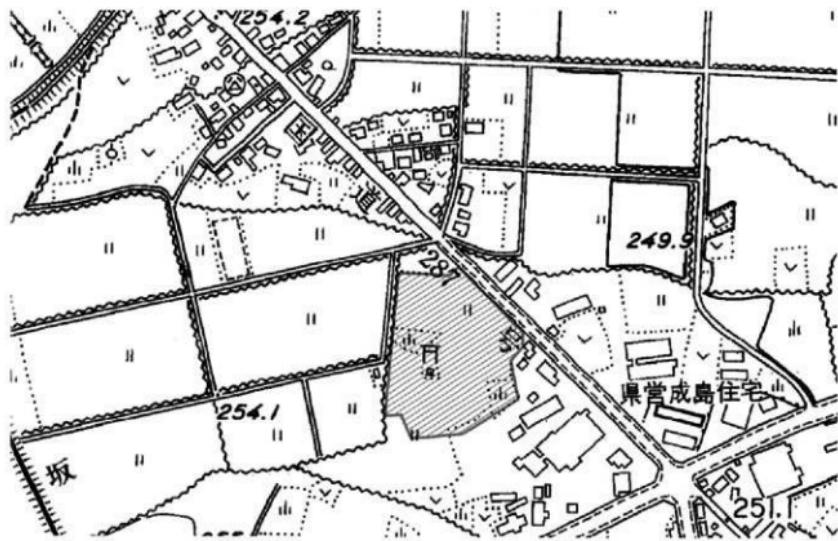
第30図 八幡原調査区位置図



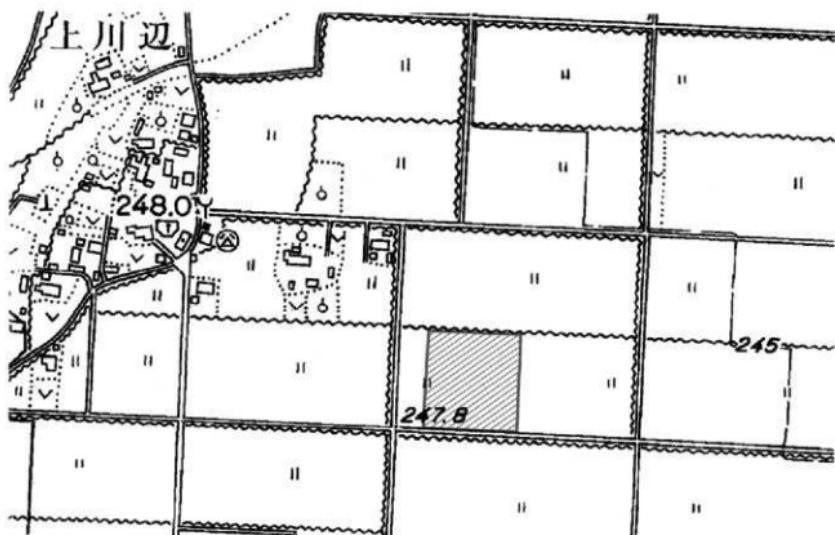
第31図 金池調査区位置図



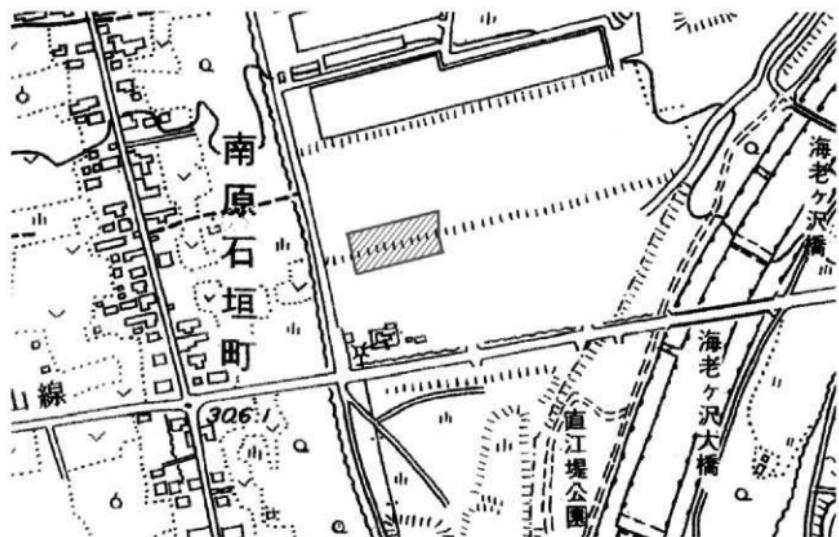
第32図 直江町調査区位置図



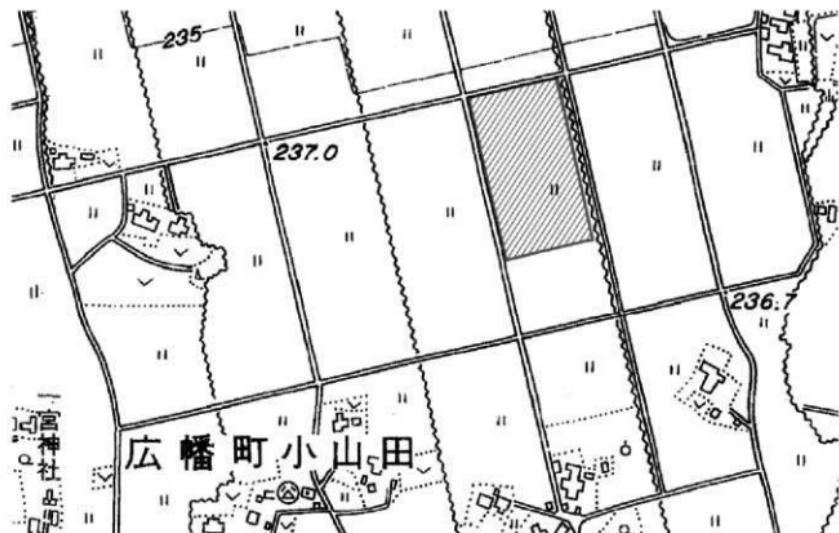
第33図 成島町調査区位置図



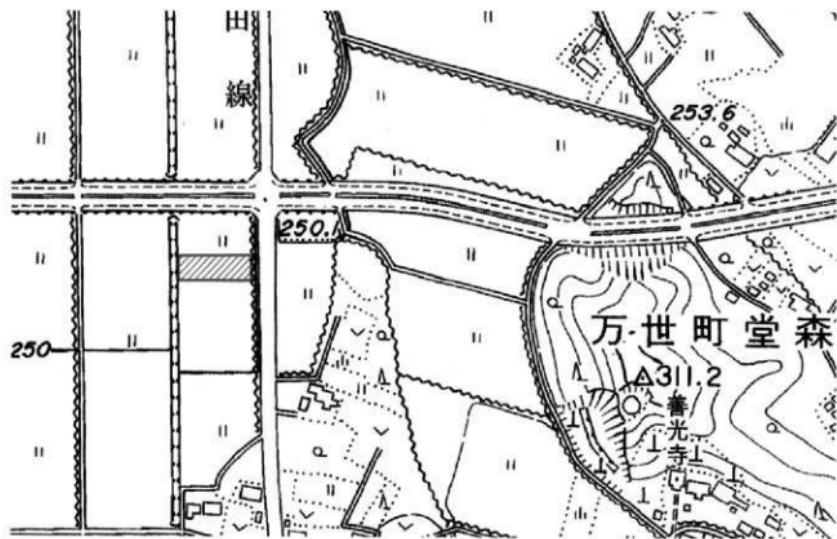
第34図 塩井町調査区位置図



第35図 李山調査区位置図



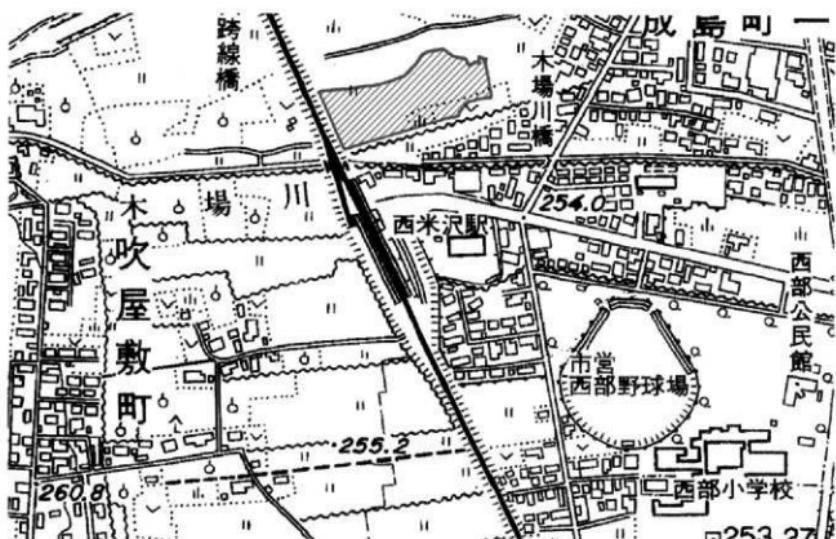
第36図 広幡町調査区位置図



第37図 万世町調査区位置図



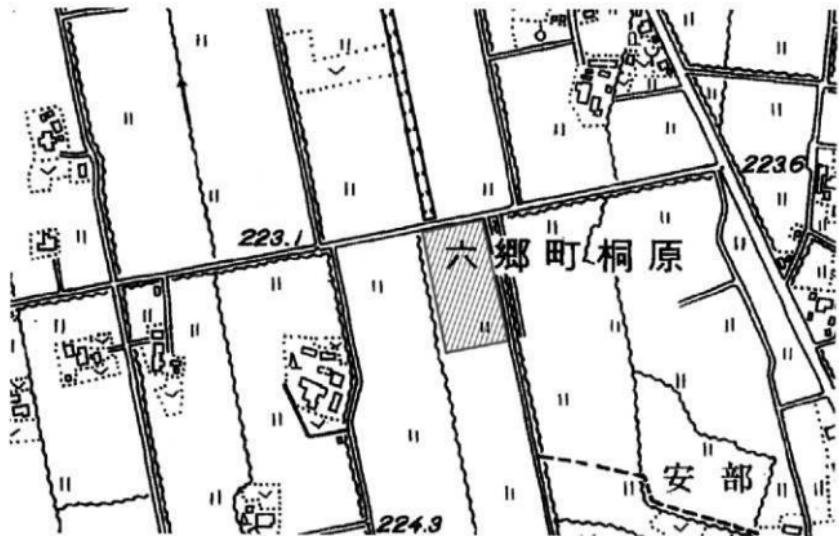
第38図 堀立川町調査区位置図



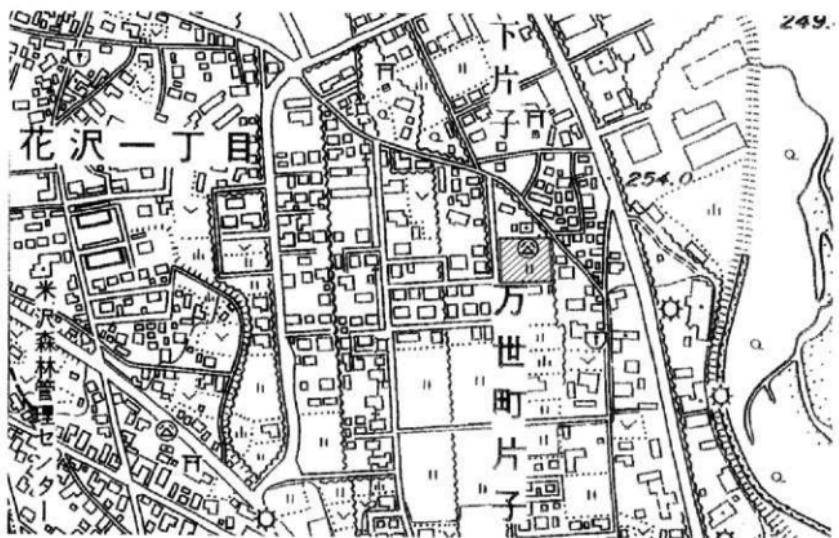
第39図 成島町調査区位置図



第40図 塩井町調査区位置図



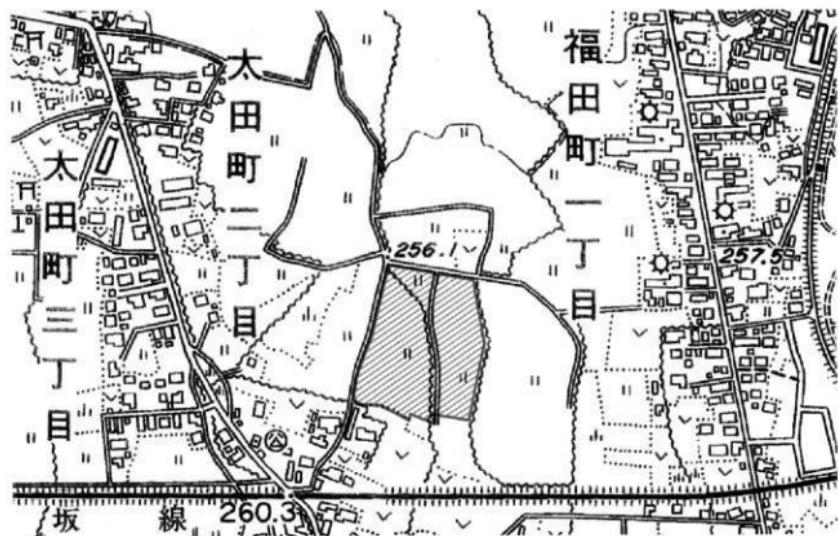
第41図 六郷町調査区位置図



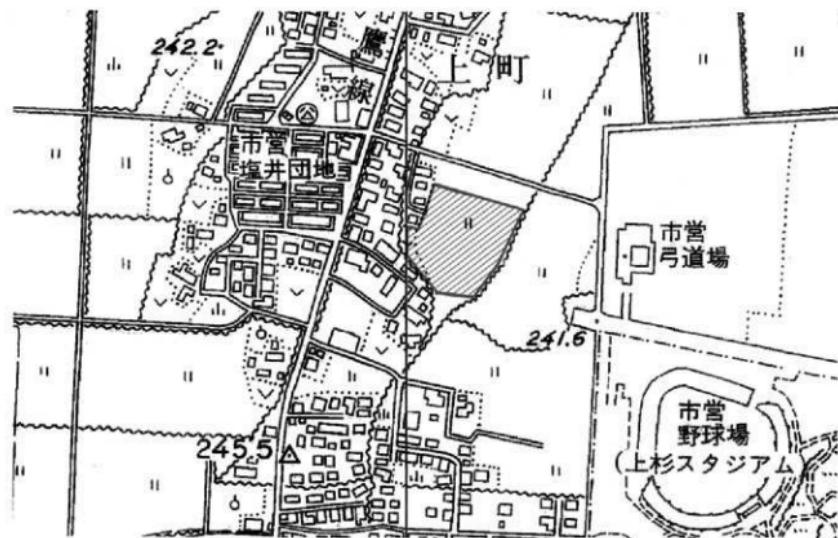
第42図 万世町調査区位置図



第43図 万世町調査区位置図



第44図 太田町調査区位置図



第45図 塩井町調査区位置図

## 第Ⅱ節 館山C遺跡発掘調査

### 1 遺跡の概要（第46図）

本遺跡は、米沢市の南西部の館山六丁目地内に位置する。南北に延びる斜平山丘陵の北端山麓に広がる地域で、川を隔てた北西の長峰山には伊達時代に構築された大規模な山城の遺構が現存し、「館山」の町名はこれらの史実に由来している。

遺跡は発達した河岸段丘上にあり、本遺跡が存在する地域は東西に発達した段丘が形成され、「一ノ坂遺跡」をはじめ、縄文時代の遺跡を中心に分布している。

この一帯の調査としては、昭和61年（1986）に「生連寺遺跡」を住宅新築に係わる発掘調査として、実施したのが最初である。その後、第46図で示す様に26地点で調査が実施され特に、平成10年（1998）には県道網木・米沢停車場線の拡幅工事に関連する発掘調査や前年の宅地造成に伴う発掘調査や平成13年の（第46図の24の黒丸箇所）成果は特筆すべき事項であった。

平成9・10年の調査によって検出した主要遺構群は縄文時代であった。それに対して平成13年の遺構群は、中世の遺構群であり、前述した山城と関連するものであった。これらの発掘調査から本遺跡は複合遺跡であることが判明している。

縄文時代は、出土した土器から早期・前期・中期・晩期の各時期が認められている。早期の土器群としては、早期中葉期の田戸上層式併行の尖底土器が復元されている。波状口縁で四箇所の突起部を有する器形である。他に早期の土器片としては、常世式、明神裏Ⅲ式が出土している。

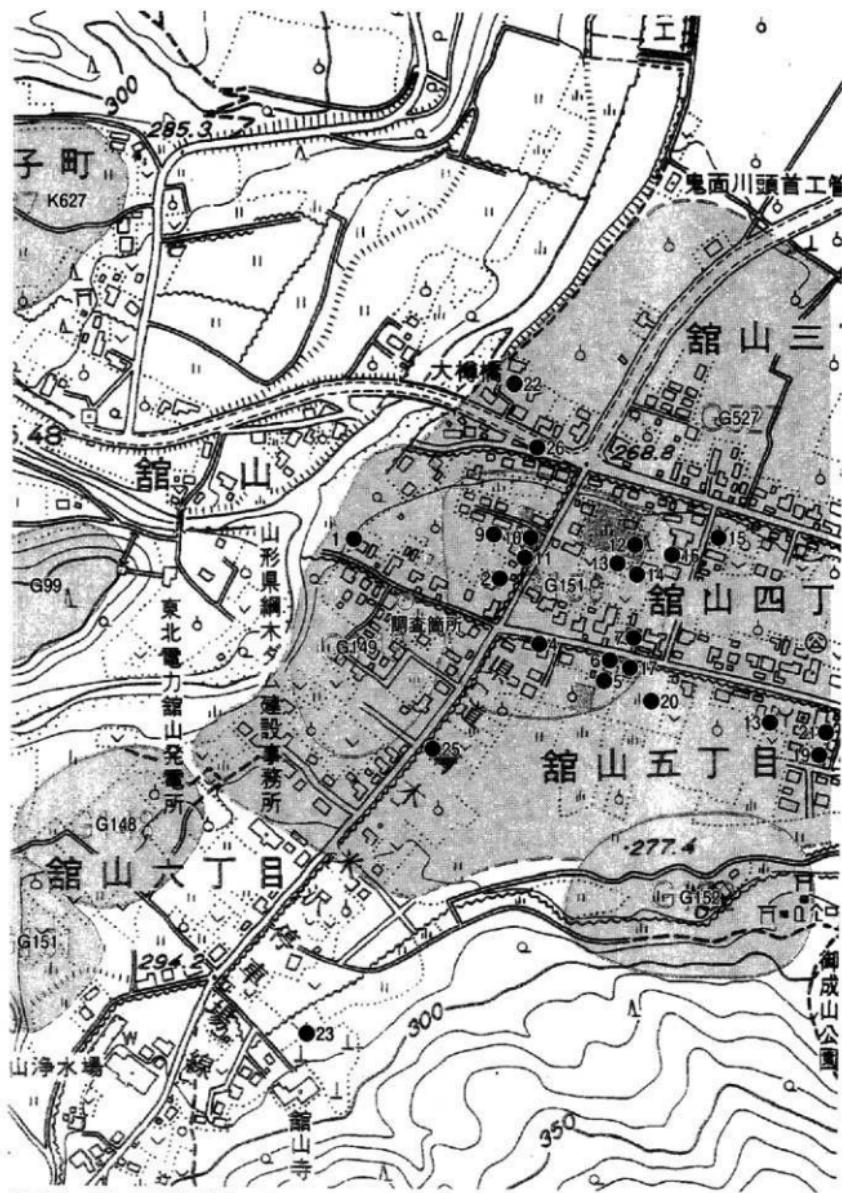
縄文早期の遺構は、住居跡1棟と少ない。これは本遺跡が複合遺跡であることから、破壊を受けており検出が困難な状況にあると考えられる。

縄文前期の土器は、関東の花積下層式併行の土器群と同じく関東地方の関山式併行の土器群で蕨状撚糸圧痕文の最終段階に位置する。前期初頭の土器群であり、ループ文は認められなかつた。遺構群としては、住居跡や土壙群が検出されている。

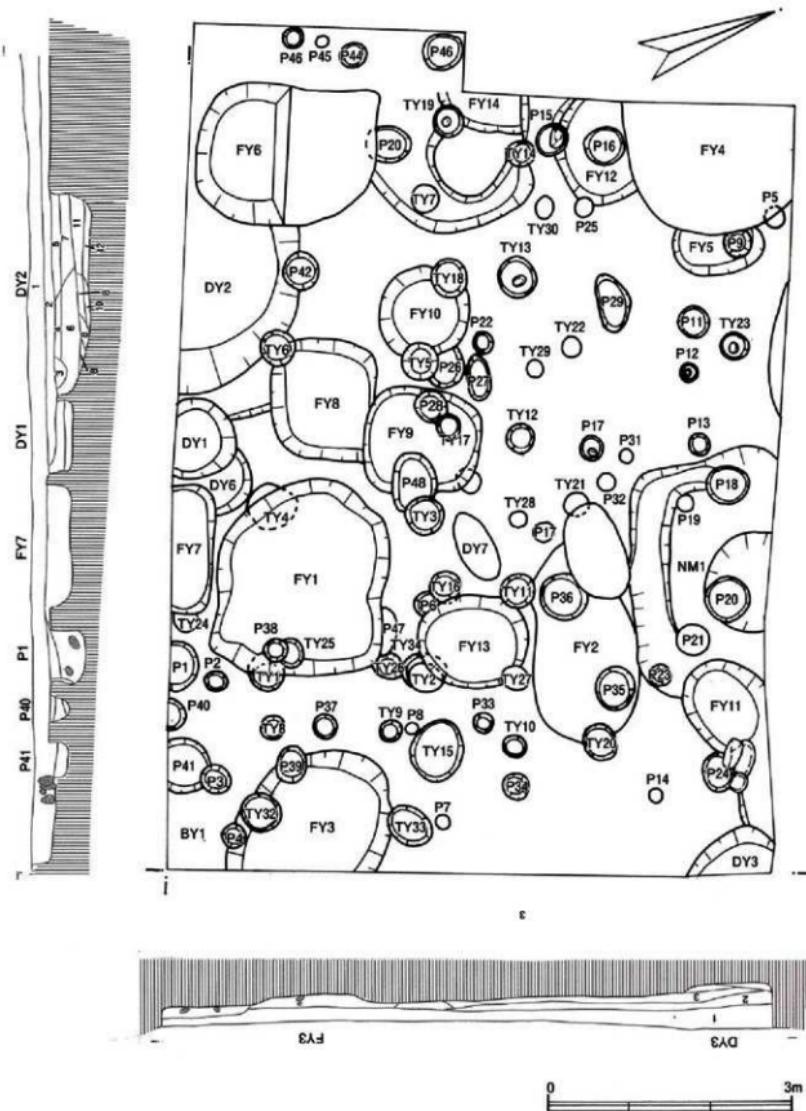
「縄文中期の土器群としては、地文の縄文に粘土紐の貼付や沈線を加えて施文する大木8a式併行の土器群は貼付文や太状の調整沈線文を組み合わせた文様構成で、渦巻文や嘴状文等の文様を配する調整沈線文で描く大木8b式併行の土器群がある。」他に「C」字状文が横に展開する大木10式併行の土器群も出土している。この様に縄文中期中葉から末葉に位置する土器群である。遺構としては、土壙群が検出されている。

縄文後期の土器群としては、縄文後期初頭の土器である関東の称名時式併行が出土している。後期は他にも東北の網取式や北陸の三十稻葉式等が出土している。遺構も他の時期に比べて圧倒的に多く認められている。晩期は小破片で占められ、大半は大洞式の土器群と考えられる。

弥生・古墳時代の遺物は現在までに発見されていない。その後は、中世・近世の遺物・遺構で占められる。中世の代表は平成13年の調査区であり、館山北館と命名された。掘立建物跡や堀跡、井戸跡が検出され、伊達氏の居城との見解が主流である。山城と平地のセットで現存する遺跡として注目される。



第46図 館山C遺跡調査箇所位置図



第47図 鎌山C遺跡遺構全体図

## 2 調査に至る経過と調査の経過

今回の調査は、個人の住宅建替えに伴うものであり、既存の住宅を解体した後の平成16年4月23日に試掘を実施している。試掘は重機を使用し、2m×5mのトレンチを3箇所に配置して実施した。

その結果、縄文土器片や陶磁器等を検出、遺構としてピット群が認められたことから発掘調査を実施することになり、関係機関や建主と協議した結果、平成16年5月10日から同年5月21日の日程で開始することになった。

敷地面積の住宅を建てる箇所が調査対象面積であるが、試掘の結果から擾乱が比較的少ない東側を調査区に設定して進め、幅7.4m、長さ10.3mの調査面積は76m<sup>2</sup>である。発掘調査の残土は調査区の西側に捨てるこことし、休憩場所は建主の好意により、調査区の北側に設置することができた。

調査開始日の5月10日は、午前中はあいにくの雨模様であったが、発掘用具の搬入を行い並行して重機による表土剥離を実施した。この作業に先立ち、調査区の東側高台から発掘前の風景の写真撮影を行なった。

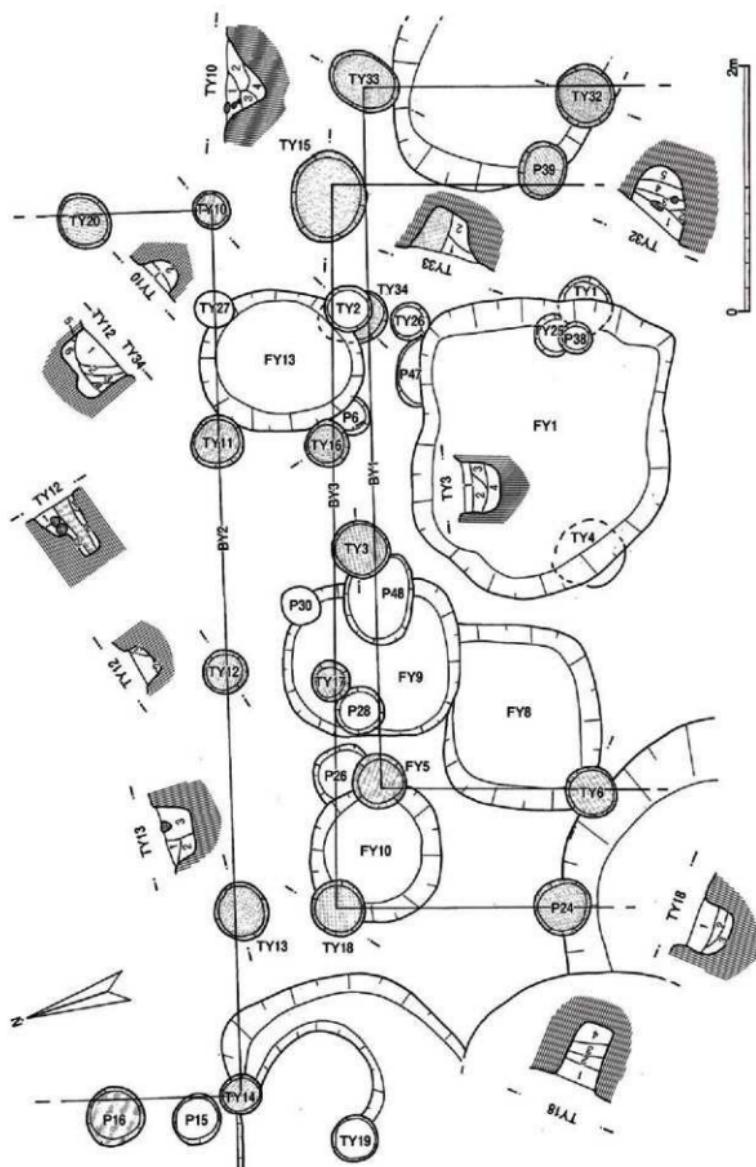
午後からは面整理を並行し、縄文土器片、剥片、陶磁器を検出している。5月11日は曇りの天候であった。この日で重機による表土剥離を終了した。面整理も2日目を向かえ3分の2を終了した。遺物としては磨製石斧、石錐がII層面から出土している。出土状況から近世の遺構によって擾乱され出土したと考えられる。5月12日は晴の天候であり、面整理作業を終了した。出土遺物から近世・中世・縄文の各時期の遺構群の存在が予想され、覆土の土層から判断して近世の遺構から掘り下げを開始した。

5月13日は曇りの天候であった。近世の遺構群の掘り下げを実施した。穴を掘って石やゴミを投棄したと想定される土壠と、池を埋め戻したと推測され遺構群である。遺物は陶磁器片を中心に少量の縄文土器片が混入して出土した。

5月14日はうす曇の天候であり、遺構の掘り下げを中心に調査を進めた。この日で大半の近世遺構群の掘り下げを終了した。この日は縄文時代の遺構を始めて確認した。出土土器から縄文時代中期末葉の時期と判断される。

5月15日は土曜日であったが、日程の都合で調査を実施している。掘立建物跡を1棟確認した。ただし、調査が狭い範囲であることから全容は確認できなかった。この日はピット群を中心に調査を進めた。5月16日は休日とした。5月17日は、ピット群の半歳を中心に調査を実施していたが、午前11時頃から雨が激しくなり現場での作業は中止し、収蔵室で遺物の洗浄を実施し、出土遺物の大半を洗浄した。

5月18日は、柱穴の半歳を実施して終了した。今日で遺構群の堀り下げを完了したので、写真撮影を実施した。19・20日と遺構平面図作成を実施することから大半の作業員さんを休みとした。予定通り、2日間で平板測量やセクション図作成が終了したので5月21日に現地で関係者に調査の成果を説明し、今回の調査を終了した。埋め戻し作業は住宅を建設する業者にお願いした。



第48図 据立建物跡平面図 (BY1・2・3)

### 3 検出遺構（第47図）

#### （1）遺構の概要

今回の調査区からは、土壙（D Y）5基をはじめ、不明遺構（F Y）14基、柱穴（T Y）34基、掘立建物跡（B Y）3棟、池跡遺構（N N）1基、不明ピット（P）49基が検出された。これらの遺構群は、重複しているのが特徴である。伴出遺物から縄文時代と17世紀以降の近世に位置するものとに分けられる。中世の遺物も少量認められたが、遺構群としては明確に把握できなかった。

これらの遺構群は、重複関係や出土遺物及び覆土の土壙から構築順序を吟味すると、次の様になると想定される。D Yは5基とも縄文時代と考えられる。次にT YとPが近世では最初に構築され、この中にはB Yも含まれる。次にはN Nと続き、最も新しいのはF Yの遺構群と言える。列挙した順に説明したい。

#### ○土壙（D Y 1～3・6・7）第49図

調査区の南方から北方東部にかけて分布する。大型のD Y 2を除き小規模な形態が特徴である。特にD Y 3・7はⅢ層面から堀り込んだ土壙であり、レンズ状の底面形態を有し遺物を殆ど含まない。覆土は自然堆積状況を呈する。出土している土器が縄文時代中期末葉の大木10式併行の土器群であり、この時期のゴミ捨て穴と考えられる。

D Y 1と6は円形の平面形状を有し、D Y 1は上場で1m、底面で80cmを計り壁面は直交する。D Y 1の深さは20cmあり、覆土からは縄文土器の口縁部1点と胴部片16点が出土している。重複するD Y 6はD Y 1と同様な形態を呈するが、やや深く30cmある。覆土からは、縄文土器の口縁部片2点、胴部片18点が出土した。Ⅱ層面から堀り込んでいる。

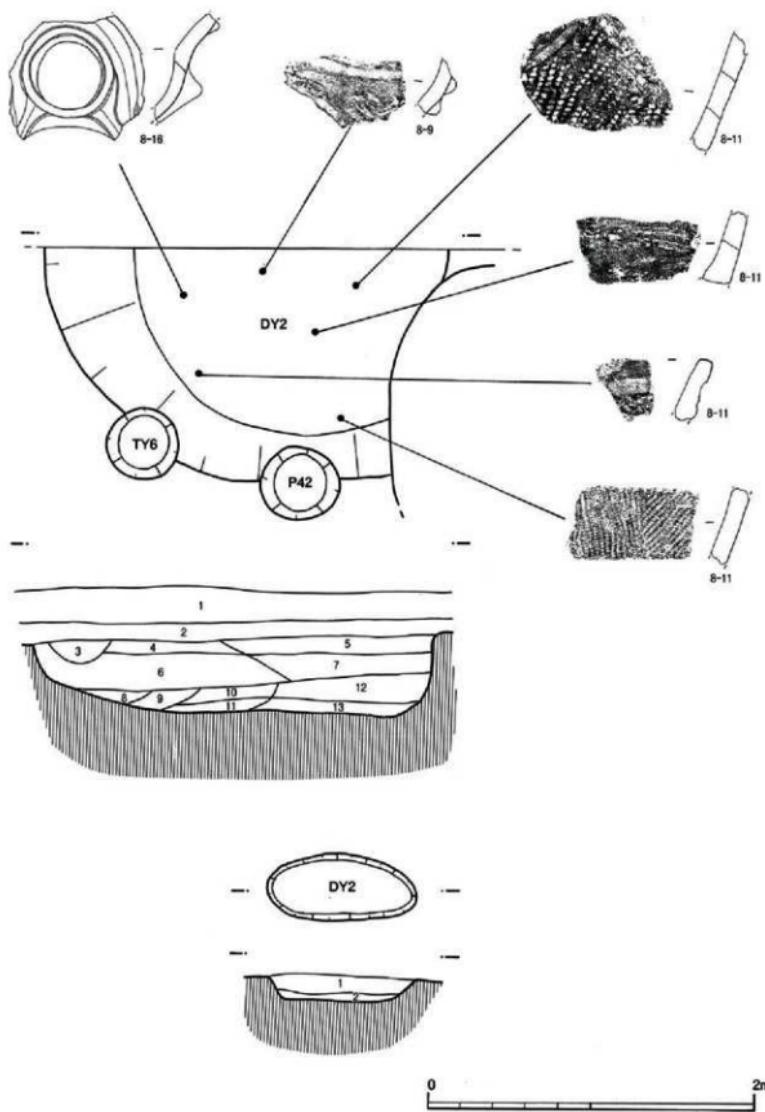
調査区の南西部に位置する、D Y 2は全体の4分の1を完掘した。壁面の立ち上がりから想定すると、住居跡の可能性も十分考えられるが、柱穴や炉跡を確認しなかったので、大型の土壙とした。小範囲に係わらず多量の遺物が出土している。縄文土器を中心に口縁部片4点、胴部片129点、底部片6点、フレーク12点、チップ4点が出土した。土器群の年代は前述した縄文中期末葉に位置する。遺物を多く含む土壙群が南東方向に集中するのは、縄文時代の遺構群が調査区の南東方向に延びていることを示唆している。

#### ○掘立建物跡（B Y 1～3）第48図

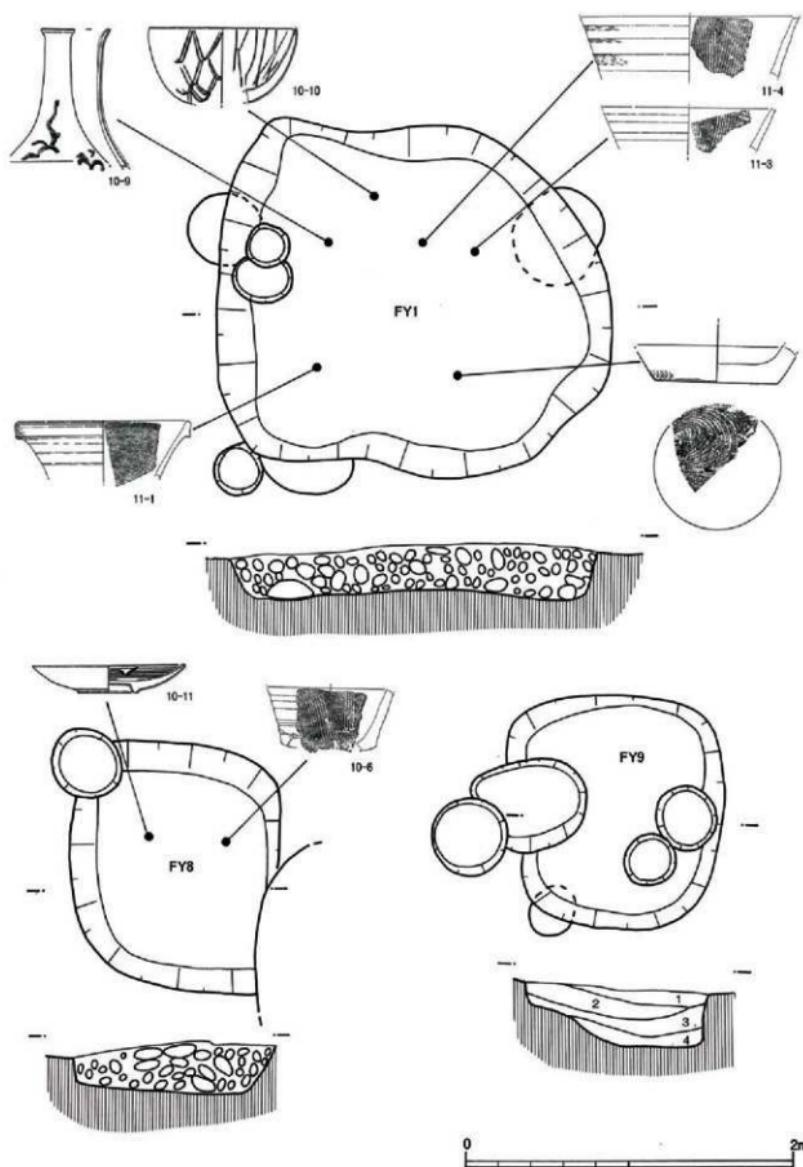
調査区の全域に亘って検出し、3棟を確認した。いずれも小規模な掘立建物を構成する柱穴群であり、掘り方や底面の形態、覆土の土色に変化が認められず時期的には早期に建替が行われた結果と考えられる。また、調査区が小範囲であったことから、全容を明らかにすることが出来なかつた。

B Y 1は、T Y 3・5・6・32～34の6基が構成するもので、東西3間の梁行と想定される。南北は桁行で1間だけの確認であるが4間で構成する可能性がある。間尺は東西、南北とも1.8mを計る。

B Y 2は、調査区の北方箇所に位置しT Y 10～14・20・P 6の7基で構成すると想定される。東西が桁行で4間、南北が梁行で1間だけ検出している。間尺は1.5m×1.8m×1.8m×1.8m、



第49図 鎌山C遺跡遺構平面図 (DY2・7)



第50図 館山C遺跡・遺構平面図 (FY1-8-9)

南北は1.2mと変則的な形態である。梁行は不明と言わざるを得ないが桁行から考えれば、梁行は3間が妥当といえる。

BY3は、南方に延びる掘立建物跡であり、TY15~18とP39・42の6基を確認した。梁行は3間を検出した東西と想定され、間尺は1.8m×1.8m×1.8mを計る。桁行は、1間だけの確認であるが4間を有すると考えられる。間尺はやや長く1.9mを計る。TY16には、柱痕跡が認められた。直径10cmと細い柱である。これらの柱穴群のなかで遺物が出土したのはTY6からだけであった。遺物は縄文土器であり年代を示す資料ではなかった。

多くの柱穴が、FYとした近世の遺構群と重複することから考慮すれば、19世紀以前の掘立建物跡であろう。出土した陶器は18世紀より遡るものではないが、瓦器や内耳土鍋が少し出土しており、柱穴群の中には中世の時期のものも含まれる可能性はある。

#### ○池跡遺構（NN1）第47図

調査区の北東部に位置し、長径3.5mを有する。全容は不明であるが、方形の平面形と推測される。縁辺には石垣を配した痕跡が認められ、中部が深く掘り込まれている。東方から水を引き込んだ形跡が認められた。

掘立建物跡を構成する、柱穴は掘り方が深いことから平面図では池の縁辺を掘り込んでいる様に理解されるが、覆土や重複関係から吟味すれば、池の方が新しい遺構である。屋敷に池があるのは、防火用水や野外の炊事場として活用されていた例は多くみられることから、本遺跡の池も屋敷に伴う近世期の池と位置づけられる。

年代は、埋め土の状況や伴出遺物から、昭和のはじめころまで存続していたと考えられる。

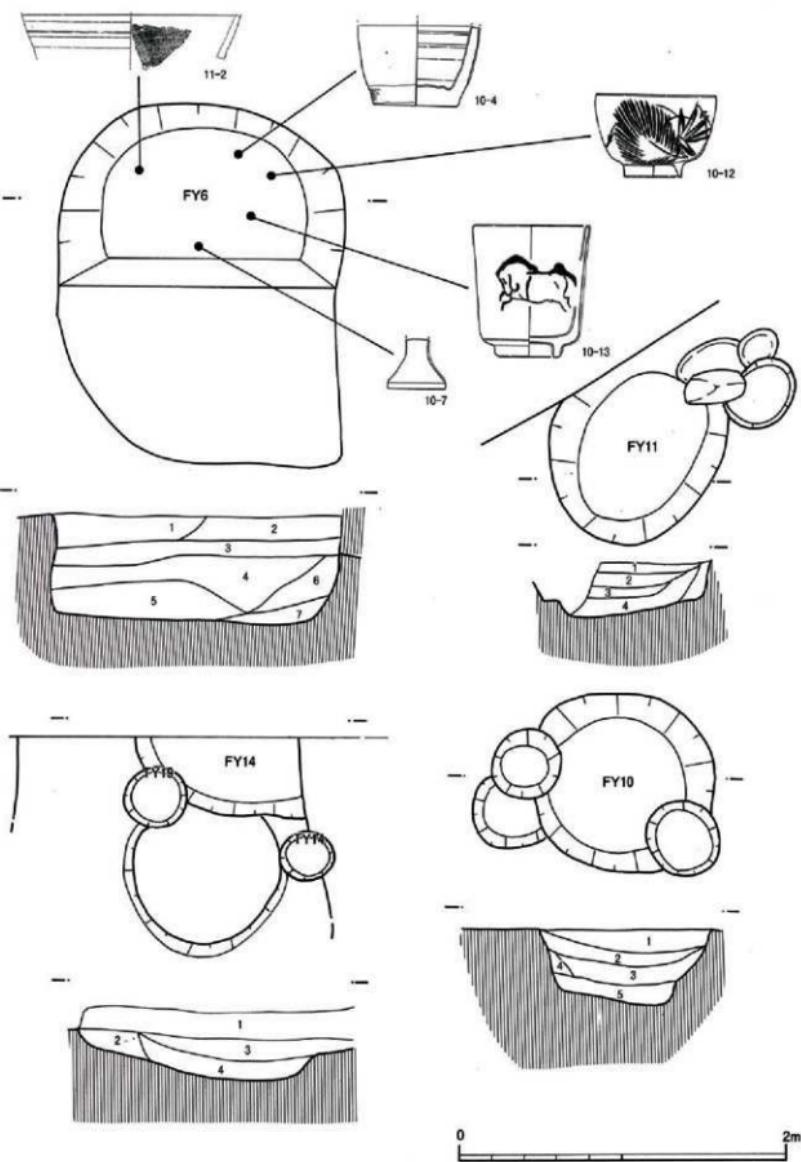
#### ○不明遺構（FY1~14）第50・51図

覆土に多量の礫を含む形態と土砂だけの覆土の2形態に分類される。前者は第50図で示したFY1・8がある。上面から底面までぎっしりつめこんでいる。方形に掘り込んだ穴に礫を投げ込んだ結果と想定される。この形態の遺構は一ノ坂遺跡でも検出されている。投げ込まれた礫に混入して日露戦争の勝利を記念した杯が出土しており、20世紀の前葉以降に構築されたことがわかる。

今回検出した遺構からは、図示した第55図9・10・11、第56図1・3・4・6の遺物が出土している。第55図9は絞唐草文様の染付け徳利であり、器形から仏具と考えられる。同図10は網目文様の染付けを有する伊万里の茶碗である。同図11は瀬戸・美濃の染付け小皿である。第11図1・3・4・6は擂鉢の破片で1・3・4は口縁部片、6は底部片である。図示したほかに、陶磁器破片26点、擂鉢片7点出土しているが、小破片で占められる。

これらの、遺物は19世紀頃の製品であり、使用年代を加味すれば19世紀の中葉から20世紀初頭に位置づけられる。従って今回検出したFY1・8は一ノ坂遺跡と同様な年代が想定される。構築目的としは、烟を開墾した際に出る利用しない礫群を収納する為に掘られた穴と考えられる。捨てられた礫群の中には、敲石や剥片等も含まれていた。

他の不明遺構群は覆土や出土遺物から年代幅をもって、構築されたと考えられる。その中でFY6からは相馬駒焼と肥前系の染付け茶碗が出土している。2点とも完形に近い状態で検出



第51図 館山C遺跡・遺構平面図 (FY6・10・11・14)

された。第55図13は相馬駒焼で18世紀末～19世紀中葉の茶碗である。これらの遺構群は屋敷に伴うゴミ捨て穴として構築され、屋敷内における建物の建替によって変容していくものと考えられる。

#### 4 出土遺物（第53～56図）

今回の調査区からは、総数で585点の遺物が検出された。これらの中で46点について実測図や拓影図を作成した。遺物は縄文時代と中・近世に大別される。

縄文時代の遺物総数は399点であり、土器、石器、礫石器に分類される。出土数は土器が最も多く321点、石器77点、礫石器1点となる。中・近世は瓦質土器、陶磁器に大別される。瓦質土器は5点、陶磁器は181点であった。列挙した順に説明を加えたい。

##### ○土器（第53図）

何れも縄文中期後葉期の土器群で16点を拓影と図化した。土器片の大半が破片であることから単位文様や文様構成を把握することは困難であるが、次の4類に細別することが可能である。

a類—図10・11・13の3点がある。太状の沈線文と粘土紐を組み合わせて渦巻文を施す仲間であり、大木8b式に併行するものとみられる。

b類—9・16の2点がある。隆線と稜線で円文や「C字」凹文を構成するもので、大木9a式に併行するもの。ただし、9に関しては単位文とみることも可能である。

c類—1～3・7・8・14の6点がある。縦位の楕円文や「C字」状文等を縦位に展開するもので、大木9b式に併行するもの。

d類—4～6・15の4点がある。稜帶と沈線文を用いて横位の「C字」状文を展開するもので、大木10a式に併行するもの。

##### ○石器（第54図）

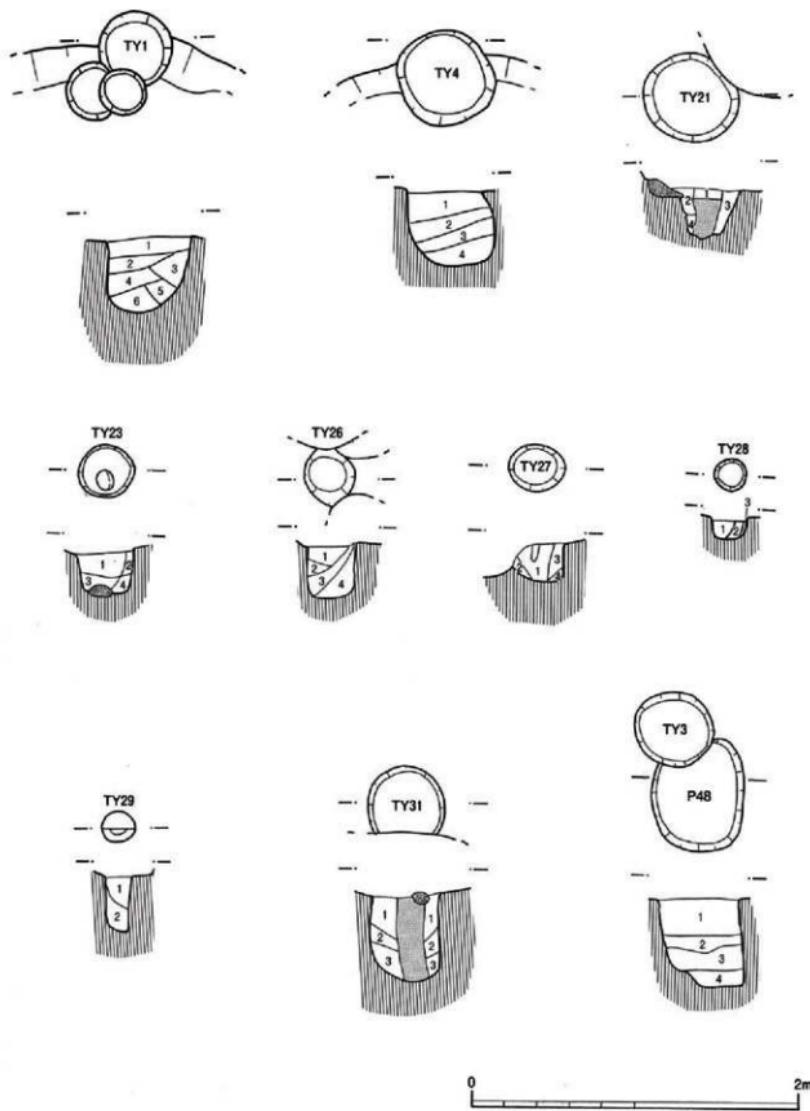
完成石器と剥片に大別され、前者は6点、後者は71点であった。前述した土器群に併行する石器群である。実測図を作成した完成石器から説明したい。

完成石器の器種としては、削器3点、石錐1点、石鎌1点、磨製石斧1点がある。削器は3点とも縁辺に使用痕が認められた。第54図の1・2・5であり、実線で示した箇所が使用した縁辺である。石材は3点とも硬質頁岩を用い1は縦長の剥片、2・5は横長の剥片を使用し片面調整を主体として整形した削器である。

9が石錐であり、縦長の剥片を両面調整によって尖状部とつまみ部を整形している。尖状部に使用痕が認められた。a面には石核の表皮を残した素材を使用している。

3は石鎌の未完成であり、基部の整形に失敗した結果、製作を断念したものと考えられる。この様な形態の石鎌は、完成にいたるまでの10段階に細類した、一ノ坂遺跡出土の資料に照合すると3・4段階に位置する。

6の磨製石斧は、刃部が欠損し基部だけが残存した形態である。綠泥片岩を素材に使用し敲打により整形した後は研磨によって仕上げている。



第52図 館山C遺跡・遺構平面図 (TY1・4・21・23・26~29・31・P48)

礫石器としては、第54図で示した7が出土している。両面に複数の窪み部があり、石材は円形の石英玄武岩を使用している。窪み部は、敲打による使用痕と理解され、縁辺にも同様な痕跡が認められた。以上の痕跡から敲き石として使用された礫石器である。

#### ○瓦質土器（第55図1～3・5・6）

1・3・5は同一個体の破片であり、器形は内耳取手の土鍋と想定される。口辺部から口縁部の内面に3単位の内耳を有するのが特徴である。外面は横位のナデ、底部はケズリを施し整形している。外面全体は真黒に煤が付着しており、鍋として使用されたものである。内耳を有する鍋の検出は北海道を中心に2耳取手の鉄鍋の分布がみられる。瓦質で3単位を有する土鍋が本市において、初めて検出されたのは昭和59年（1984）に米沢市教育委員会が調査を実施した、上浅川遺跡第1・2調査区からの検出であった。

この遺跡は上郷地区に所在し、堀によって方形に区画された館跡で、伴出した遺物から中世に位置づけられている遺跡である。その後、内耳土鍋の出土は米沢市内の中・近世の遺跡を中心に増えづき、特に米沢市北東部の中田町に所在する大浦C遺跡からは完形の内耳土鍋が出土している。この遺跡も堀によって区画された館跡であり、中世の館跡と報告されている。

使用された年代は、内耳鉄鍋は15世紀～16世紀頃であり、内耳鉄鍋を模したとすれば同様な年代が考えられるが、それに先行するとの意見もあり結論は差し控えたい。今回出土した内耳土鍋が使用された時期は、伊達時代から上杉入部の時代と考えるのが妥当であり、所謂戦国末期と考えたい。

第55図2は火消壺の蓋であり、つまみ部が欠損している。火消壺が出現するのは、17世紀後半以降で、内耳取手土鍋よりも新しい瓦質土器である。火消壺は現在も使用されており、年代の特定は難しいが、供伴する遺物から想定すれば18世紀～19世紀と推測される。

第55図6は硬質瓦質の火鉢の底部に近い破片と想定される。火鉢は17世紀初頭に出現し軟質瓦質や土師質が知られている。硬質瓦質が出現するのは、18世紀の中葉以降とされ火消壺とは同様な使用年代と推測される。

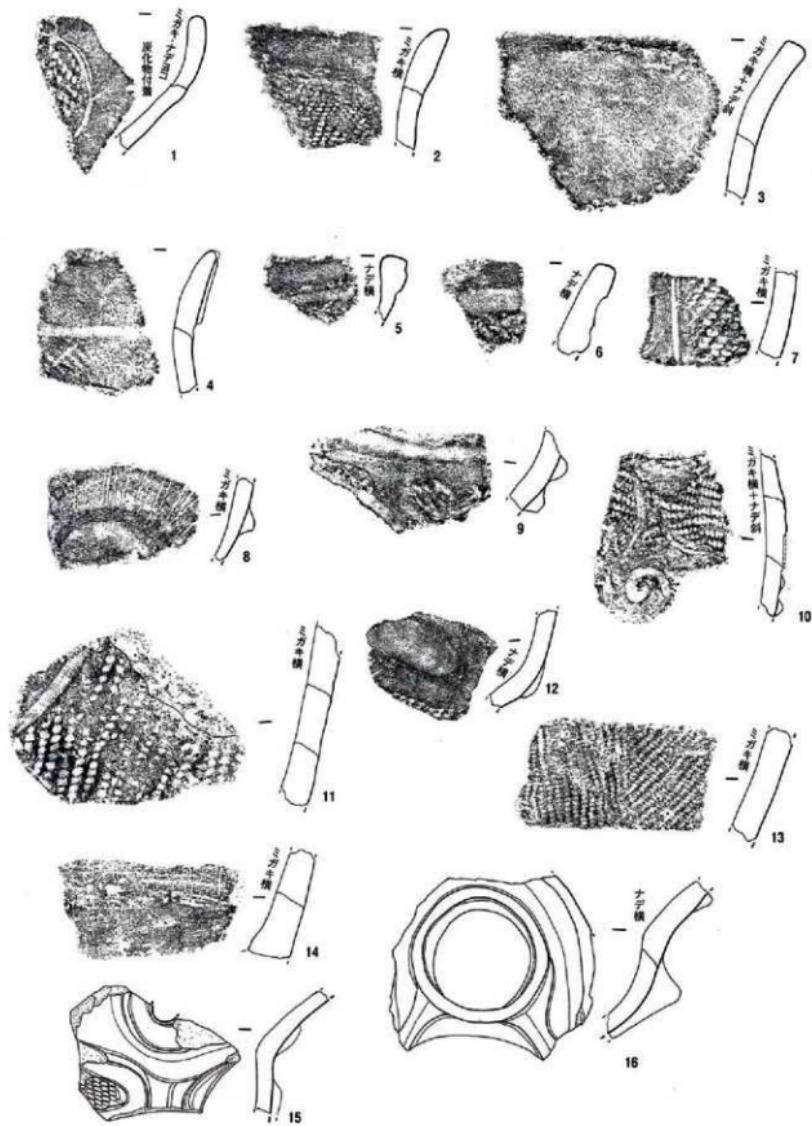
以上、述べたように中世に位置する可能性があるのは、第55図の1・3・5の内耳取手土鍋だけであった。

#### ○陶器（第55図4・7～13・第56図1～6）

調査区の全域に分布するF Yとした遺構を中心に出土している。器種としては徳利、切立、茶碗、小皿、仏飯器、壺、摺鉢があり、陶器が大半を占めている。破片が大半であり、図示できたのは、13点に過ぎない。列挙した順に説明を加えたい。

徳利としては、第55図9があり器種としては出土数が少ない。長首を有する小形の徳利で蛸唐草の文様が藍色の染付けで描かれている。器形から判断して、供献用の徳利と考えられる。宮城県の切込窯の製品と考えられ、19世紀の中葉頃の年代が想定される。

切立は、第55図8の他に3点出土しているが、器形が判明したのは図示した1点だけであった。図示した切立は米沢市に所在した窯の製品であり、成島焼と呼ばれている。天明元年（1781）に藩窯として操業を開始し、昭和10年（1935）まで存続していた。154年間の操業期間がある



第53図 鎌山C遺跡出土遺物拓影図

ことから、今回の出土遺物が位置する年代の特定は困難であるが、共伴する遺物群から考慮すれば、19世紀頃が妥当と推測したい。外面と内面に鉄釉を施している。

現在も使用され、用途は味噌や塩をいれる容器として、大形の器形は漬物用として使用されてきた。

茶碗は、図示した他にも多数認められた器種である。第55図の9・10・13を図示した。12・13は完形である。10は網目文様の染め付けを両面に描いた肥前の磁器と考えられ底部が欠損している。18世紀頃の製品であろう。12は外面に植物の葉を藍色で描いた小振り椀で、瀬戸・美濃の19世紀中葉の製品であろう。13は外面に鉄釉で馬を描いたもので、内面に大堀相馬焼特有の貫乳が認められる。この窯は寛永年間（1624）から現代まで続く藩窯であり、貫乳に仕上げるのは明治維新（1868）以降であると言われている。

小皿も出土数が多い器種であり、その中で器形が明確な11を図示した。この小皿は重ね焼きによって焼成された痕跡を内面底部に残している。笹の葉を表す染付文様を描いている瀬戸・美濃の製品で、19世紀頃の年代が想定される。

仏飯器としては、第55図があり、底部だけの出土であつた。底面には回転糸切りの痕跡があり、右回転の輻轆を使用して整形している。この器種は仏前に飯を盛る器で馬上杯状の形態である。今回の出土遺物は坏部が欠損している。17世紀中葉に出現し幕末まで続く。瀬戸・美濃陶器で18世紀末葉の年代が推測される。

壺は図示した他に、4点認められたが器形が判明できたのは図示した1点だけであった。第55図4であり、胴部から口縁部が欠損しており、全体の器形が不明であるが内面にも釉が施してあることから、液体を入れる壺であろう。釉や胎土の観察から切立と同じ成島焼と考えられる。年代も同様と推測される。

擂鉢は図示した以外に6点出土している。図示した6点は口縁部及び底部の破片である。擂鉢は、江戸時代を通じて出土する生活必需品であり、擂る機能は主に「食」に関連して用いられたと考えられ、文献資料から豆腐、ゴマ、芋類、味噌などを加工する用途に使われた。第56図5・6は高台をもたない形態であり、擂目も粗いことから17世紀から18世紀の擂鉢と考えられ、胎土が灰褐色を呈す特徴や器形から備前の擂鉢と考えられる。

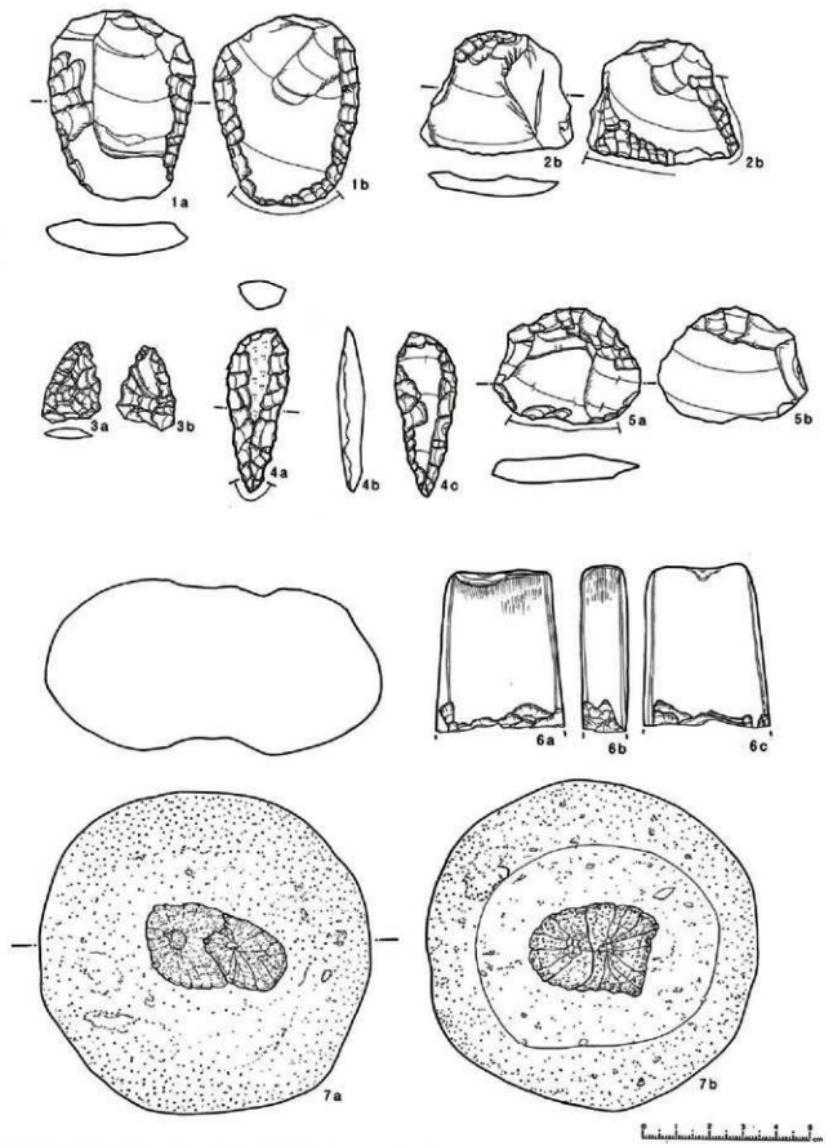
## 5 まとめ

調査区は76m<sup>2</sup>と小範囲であったが、重複して遺構が検出され、遺物も各時期を示す特徴を有する器種が出土した。これらの遺構、遺物を年代別に整理し、まとめとしたい。

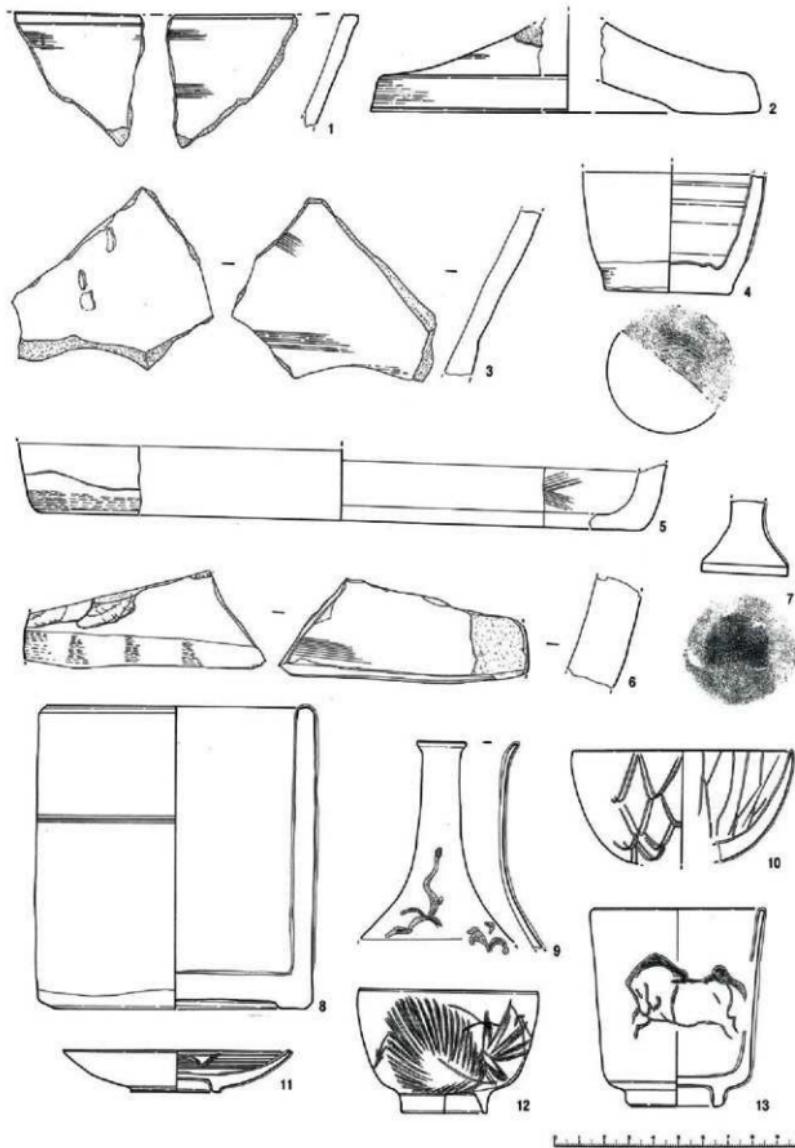
### ○遺構（縄文時代）

土壤群を中心に確認され、そのなかでもDY2は竪穴住居跡の可能性が指摘される。出土した縄文土器の大半はこの土壤からであった。時期は縄文中期末葉であり、本遺跡周辺の一連の調査で確認した成果を加味すれば、縄文早期から晩期に至る各時期が存在するのは明確であり米沢の西南部を代表する複合遺跡群と言えよう。

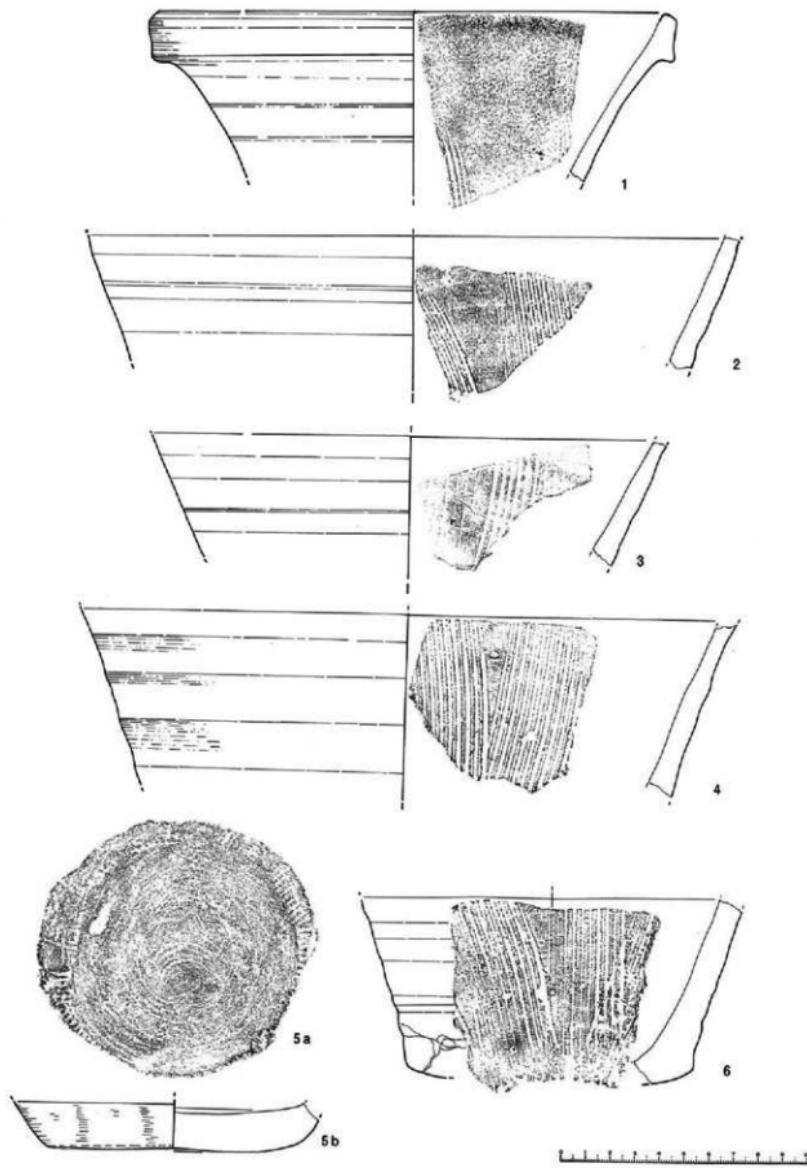
第46図で示す様に、数十箇所が発掘調査された。その結果から縄文後期が主体であると報告



第54図 館山C遺跡出土遺物実測図（石器・礫器）



第55図 館山C遺跡出土遺物実測図（瓦器・陶磁器）



第56図 鎌山C遺跡出土遺物実測図（摺鉢）

されており、今回の調査区からは縄文後期の土器が出土していないので、縄文中期の遺構群が南方に広がって行くと想定される。

#### ○中世の遺構

この時期に位置する明確な遺構は、確認できなかったが3棟確認した掘立建物跡が中世の可能性があると推測される。近世の掘立建物跡に見られる底面に礎を配する形態や、埋め土に小礎を含む特徴を有する柱穴は認められなかった。第46図の24の地点に所在する館山北館からは中世の掘立建物跡が33棟確認されている。他に井戸跡や目隠し等もあり、伊達時代の家臣団の館であると報告している。

柱穴の掘り方は、平均すると50~60cmあり、今回検出した掘立建物跡を構成する柱穴よりも大型である。掘り方は、時代が新しいほど小規模になってゆくと言われている。

#### ○近世の遺構

出土遺物から18世紀~19世紀後半の年代に構築された遺構群である。調査区は上杉入部後に家臣団の住居として土地が区画された地区であり、絵図面にも記載されている。FYとした遺構群は明治維新以降に構築された可能性が高い。

近世の遺構としては、NN1の池跡がある。上杉家臣団の住居として活用されていた時期に構築されたと推測したい。池は用水、排水の役目も兼ねており、さらに米沢藩は鯉を養殖することも奨励している。表土を剥離する際に礎石に使用したと考えられる扁平の河原石が確認されており、掘立建物から礎石の建物と変容したことを見ている。しかしながら、いつの時期に変容したかは明確には出来なかった。礎石は、多くの場合取り除かれ新しい基礎が構築されることから、遺構として確認できない現実がある。

掘立建物は、最近まで農家の作業小屋や倉庫として建てられてきた。それ故に掘立建物が古いとは言えない場合もある。一方、河原石を礎石とする民家も現存しており、古いものは幕末には確實に廻る。これらの事項から民衆が礎石建物を建てるのは江戸時代中頃と考えたい。

今回の調査区全域に確認された遺構群は、縄文時代から現在までに絶え間なく生活の場として活用された結果であると言える。

#### ○縄文時代の遺物

使用痕のある削器や石錐の出土は、調査区が縄文時代の生活の場であったことを確実に物語っている。土器は復元できたものはなかったが、縄文時代中期中葉から末葉を示す資料であった。

#### ○中世の遺物

瓦質土器を中心とした遺物群で少量の出土であった。この時期は遺物が少ないので特徴である。これは木器を多用するため結果として残存しないとの意見がある。米沢にはこの時期の窯跡として戸長里窯があるが、今回の調査区からは出土しなかった。

#### ○近世の遺物

陶磁器は多様な器種が出土しており、また全国の窯で焼成された製品であり流通が活発であったことを示している。

## 第三節 米沢城跡

### 1 遺跡の概要と調査の経過

本遺跡は、市街地の松が岬公園一帯に所在し、標高248～252mに所在する。遺跡は、本丸跡、二の丸跡、三の丸跡の一部を含めた、東西約770m、南北900mの約690,000m<sup>2</sup>の範囲を遺跡として登録している。

米沢城跡に関わる調査としては、伝国社（米沢市上杉博物館）、城史苑等の大規模開発をはじめ、住宅建築を中心に、過去、數十回実施している。これらの調査で共通して云えることは、表土下の地山層上部が攪乱し整地層になっていることで、殆どの箇所で白壁や建築部材等が焼けた状態で確認され、多量の焼土や炭化物が含まれるのが特徴である。これらの状況は、火災後に整地したものと考えられる。これらの裏付けとなるのは、文献（米沢城地名撰）によると、明治、大正頃の米沢城付近では10年前後の割合で大火が起きていたことが記されている。

さて、当該地の開発は建設部都市計画課の公園参道整備事業に係るもので、長さ88m、幅6.8m、深さ60cm、事業面積約598m<sup>2</sup>である。

調査は、平成17年11月24日から掘削工事に入るとの報告を受け、掘削の立会い調査を行った。その結果、拝殿に通ずる参道が東西方向にあり、その参道内の南北方向に6列の石組が規則的に並んで確認された。このことから翌25日に、これらの石組付近の土砂を取り除き面整理、精査し、平面図作成（平板測量）・写真撮影等を適宜実施した。

### 2 検出遺構

今回の調査で確認されたのは配石遺構である。1と2列目の範囲は、東西2m、南北5mで確認された。南側と北側にあたる側溝付近には確認されなかった。南側は既存の側溝設置時に、また北側は側溝設置及び水道管埋設時によって攪乱されたものと推測される。

地山層は、表土下60cmが茶褐色粘土質シルト層であり、この地山層は粘土層を叩き絞めた状況で確認された。配石遺構の礫は安山岩の河原石を使用している。礫の配列は、基本的に4列をなし、東側から1列目と2列目及び3列目の一部は河原石を縦に配置しているのに対し、東側から3列目の一部と4列目は河原石を横（平坦）に配置している。しかし礫は、東側から1と2列目及び5～7列目一部は欠損しており、1と2列目には礫の抜き取り跡が確認された。

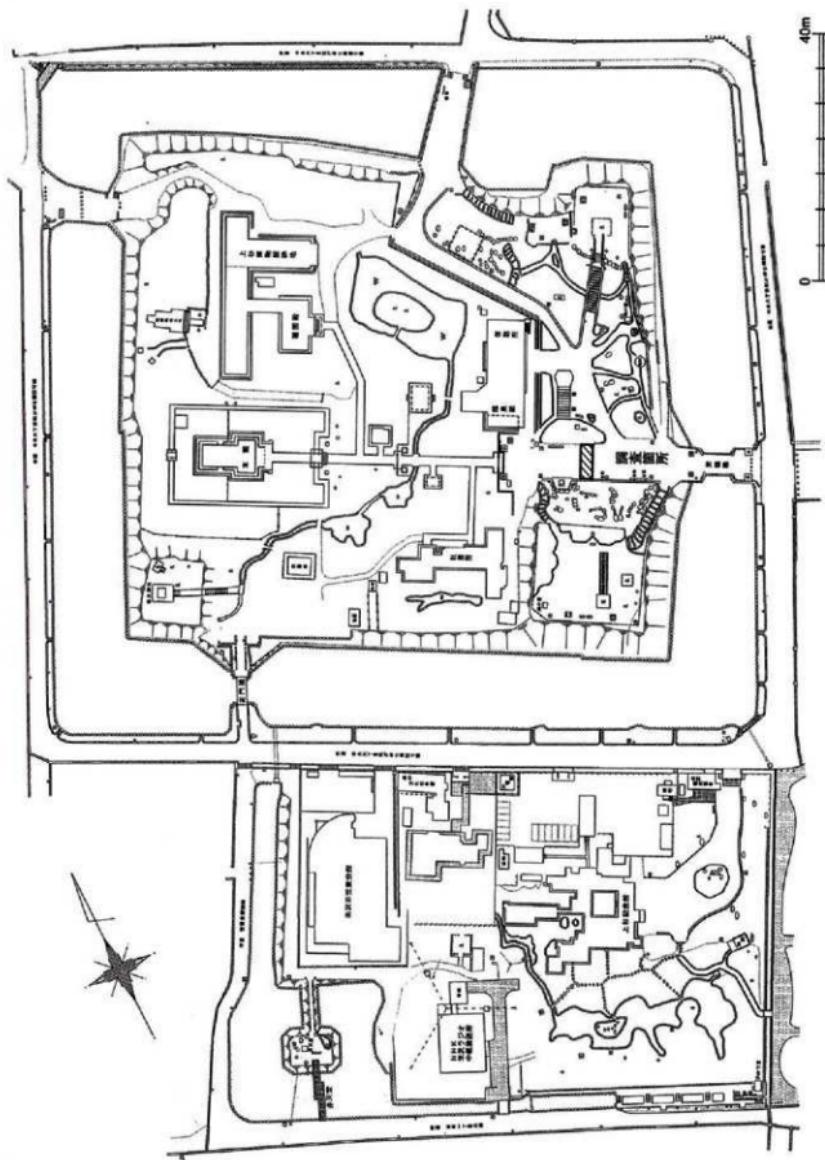
礫の大きさは、長径30～40cmが主体をなしており、最大では50cm以上のものが数個ある。中央部と西側一部には小礫（10cm未満）も確認された。この小礫は、主体とする礫を固定する役割と考えられ、部分的に存在することから後世によって抜き取られたものとみられる。

配石遺構の用途を考察するため、「松岬城塙図、享和2年（1802）」（松岬城とは米沢城の異称）の絵図に照合してみると、現参道付近には水路状の施設が南北方向に走っていることが示されている。このことを前提に推測した場合、今回の配石遺構は、当時の水路跡の可能性が高いと考えている。

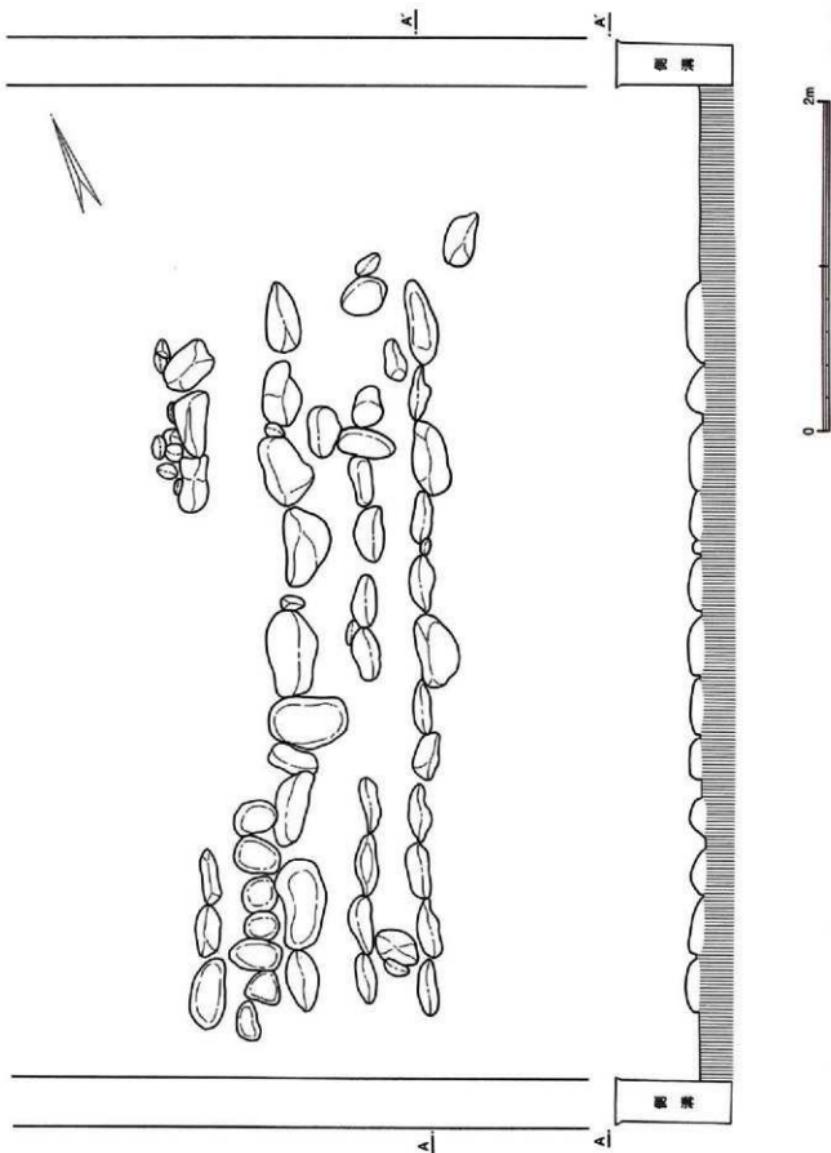
今回の調査区では出土遺物はなかった。なお、この配石遺構を保存できないか協議した結果、現状保存が可能であり、保存を前提に工事を進めるよう指示した。



第57図 米沢城跡位置図



第58図 松ヶ岬公園平面図



第59図 配石造構

## 第IV節 京塚古墳群確認調査

### 1 古墳群の概要

京塚古墳群が所在する広幡町京塚地区は、川西町に通じる国道287号線の上小菅地区に接している。古墳群は、京塚地区南方の神明山丘陵から北側の山麓にかけて分布し、眼下には米沢西部の水田地帯が広がっている。

古墳群は、平成12年（2000）の成島古墳群の関連調査の際に発見され、その後の分布調査や確認調査で明確になった。分布調査は、平成14年の12月9日から同年12月25日の期間で実施している。その結果、1基の前方後円墳と9基の円墳を確認している。平成15年10月21日から同年11月26日の期間での調査は、4号墳の測量調査と6号墳の確認調査を実施した。

第61図に示したのが、平成14年に作成した分布図である。標高272mの最高地に位置する1号墳を始め、北東端部の前方後円墳の4号墳、沢を隔てた西方の尾根沿いに分布する4基の円墳群の合計6基が丘陵に構築された古墳群である。

山麓の平坦部には、7号墳～10号墳の4基が確認されている。これらの円墳群は「お経塚」と呼ばれており、経塚の可能性もある。丘陵の古墳群から、南方に約1.5km登ると山頂に達する。山頂には1基の前方後円墳と5基の方墳からなる成島古墳群が所在する。成島古墳群から北方に延びる尾根を選択して構築したのが、京塚古墳群の1号墳～6号墳であり、高低差は55mある。

1号墳は、長径13m、墳頂径9mの円墳であり、高さは1.73mと低い墳丘である。周溝は認められなかった。墳頂には、幅2mの浅い窪地が南北に帶状に認められた。この1号墳から北方に50m離れて、2号墳が構築されている。1号墳との高低差は6mであり、緩やかな傾斜地を選択している。2号墳の北方には3号墳が隣接している。

2号墳は標高263mの地点にあり、幅2mの周溝が全周する。墳丘の高さは1.5mで、墳頂の中心部が窪地になっている。この窪地は主体部の木棺が腐食して、陥没した痕跡と考えられる。長径19mを有する。周溝の幅は2m、墳頂径は9mである。

2号墳の北方に隣接して構築された3号墳は、山寄せ型の円墳で谷側にだけ周溝が廻り、長径8m、墳頂径9mで、3号墳の構築後に2号墳を構築したものと考えている。3号墳はやや急斜面に構築されており、北方から眺望すれば実際よりも高く映る。1号墳から3号墳までは、ほぼ一直線上に構築している。これら3基の中軸線から北西に外れた地点に、最も小規模な5号墳がある。長径5m、墳頂径は3mで3号墳と同様に山寄せ型の円墳である。高さは1m弱と低い。

平成15年に確認試掘調査を実施した6号墳は、丘陵の末端部に位置し長径19mを有し、3、5号墳と同様に山寄せ型の形態である。墳頂径は10mの平坦である。山側に幅1mの周溝が廻り、谷側には幅2mの周庭が確認された。今回の調査対象である4号墳は前方後円墳であり、前述した2号墳と沢を挟んで、40mの東側尾根に構築されている。

第62図は、平成15年度に作成した4号墳の測量図である。丘陵の尾根を利用して構築した前方



第60図 京塚古墳群位置図

後円墳で、古墳の中軸線を境に現在、東側は金松寺の寺領、西方部は個人所有に分かれている。現況測量の結果、全長は42m、後円部の直径21.7m、前方部長20.3m、前方部幅14.7mであった。後円部の高さは3m、前方部は1.5mであり、南に開く前方部から後円部にかけては、緩やかに傾斜し前方部と後円部の高低差は3mある。周溝は、くびれ部から前方部にかけて明瞭に認められるが、前方部の端に向かうに従って周溝が消滅する。

後円部の同様に、くびれ部から後円部にかけての半周は明瞭であるが、北側は幅2.5mの周庭状となっている。周溝の幅は、くびれ部が最も広く3m、前方部に進むにつれて狭くなり、前方部付近では1m弱となっている。墳丘は、後円部及び前方部ともに無段構築であり、後円部を中心に盛土をしている。

確認調査を実施した6号墳は、標高250mから243mの丘陵端部を削平及び、盛土によって構築した墳丘である。墳丘の中央部に、盛土の2層面から掘り込んだ墓壙のプランを確認した。この箇所は当初から窪地となっており、墓壙の中心部にあたる。

主体部は、長径5.8m、幅1.35m、深さ1.4mで、墳頂から木棺までの埋土は65cmで剖竹型木棺と推測される。

木棺の幅は、約75cmで長さは4.5mを有する。遺物は認められなかった。これらの成果から、墓壙は墳丘を積み上げた後に墓壙を掘り下げ、木棺を設置後、明赤褐色土で埋納し、最後に墳丘表土に15cm位の化粧土で覆って仕上げている。年代は5世紀後半から6世紀前半と想定するが確証はない。

以上が、これまでの調査成果である。平成16年は、4号墳を対象とした確認調査であり、主体部の位置や墳龍線の確認、周溝底面における遺物の有無を目的として実施した。

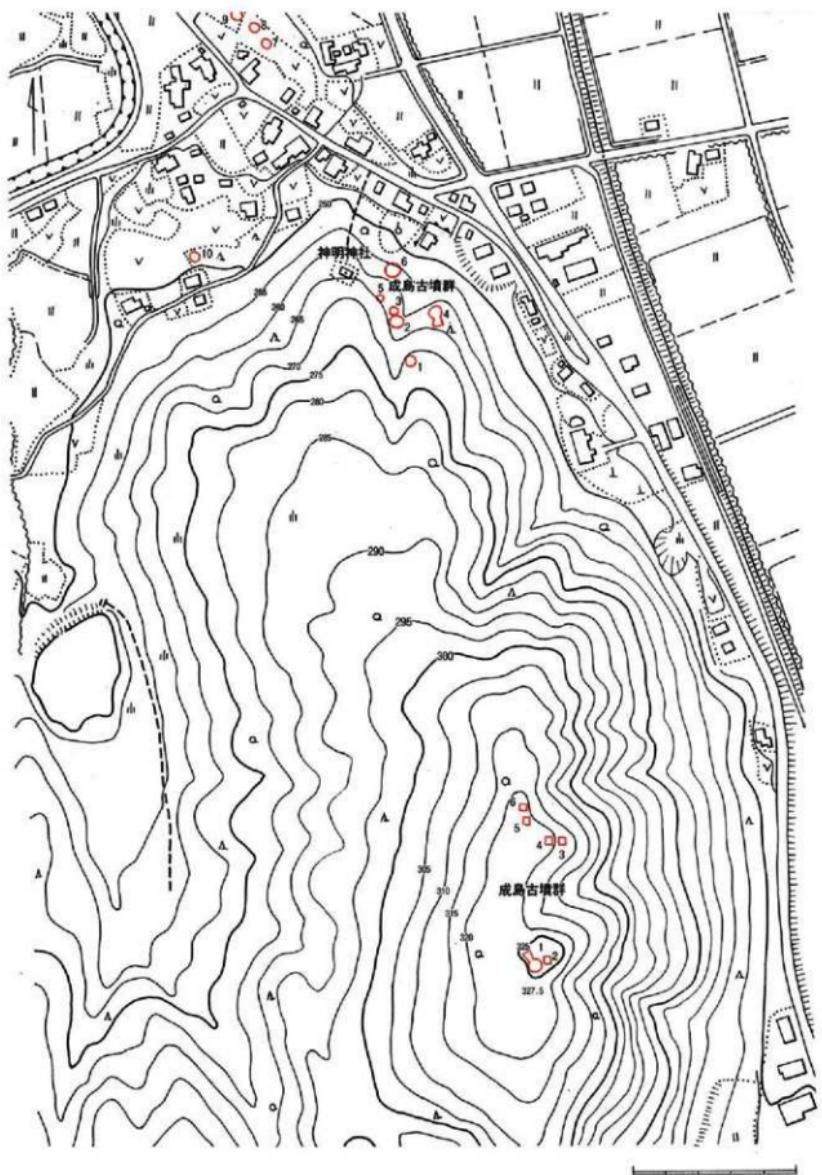
## 2 調査の経過

調査は平成16年11月1日から同年11月30日の期間で実施した。古墳群が所在する一帯は松食い虫の被害を受けて、多くの松の木が切り倒された。その結果、米沢盆地に広がる田園地帯を一望できる。

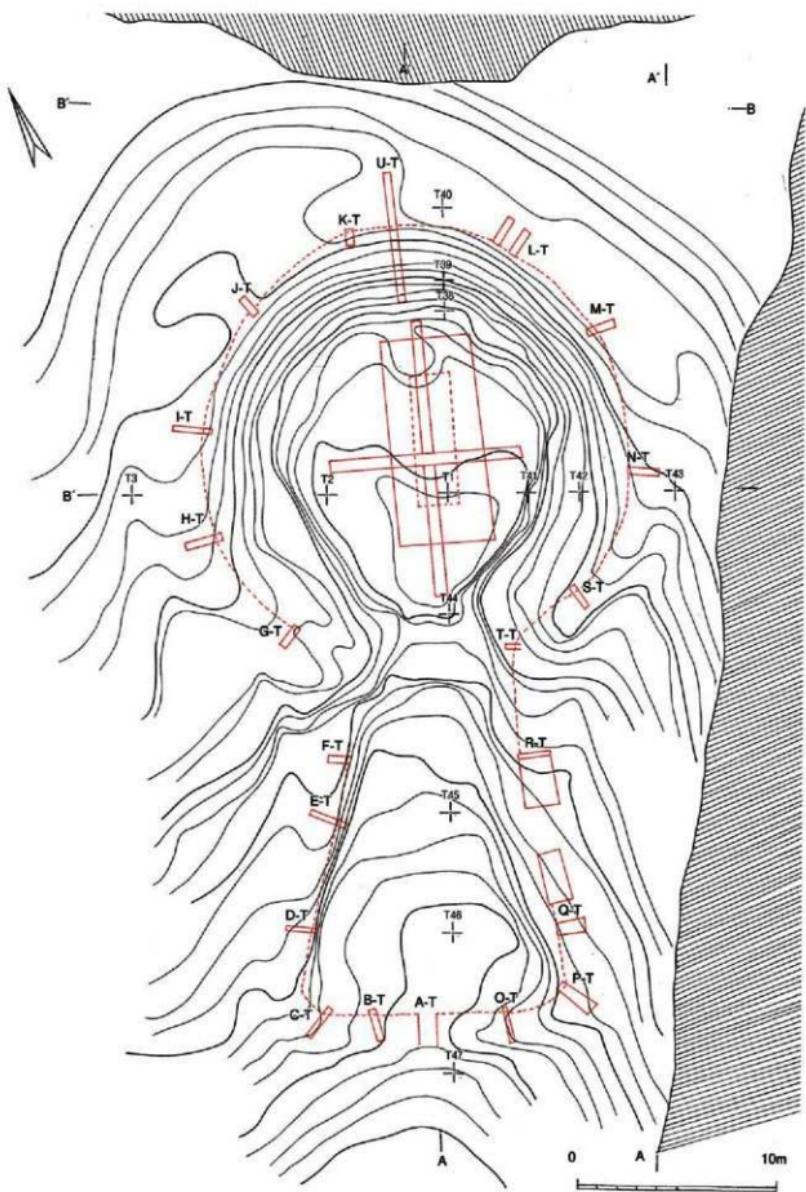
初めに墳丘を覆う落ち葉や腐植土の除去から開始し、この作業に4日間を要した。次に墳丘の形態を把握するために、AからUの21箇所に小規模なトレンチを配し、掘り下げを実施した。この作業には、10日間を要した。これらの箇所からは、前方部を中心に土師器壺6個体分の破片が出土した。いずれも磨滅が著しく、復元は困難であった。

前方部の削平箇所からは、後世の焚き火によって生じた炭が多量に認められた。この箇所からは「寛永通宝」が出土しており、江戸時代以降の整地と考えられる。

その後、11月22日には、後円部に十字に配したトレンチを最深で約20cm掘り下げて精査した結果、主体部及び墓壙とみられる土色変化が認められ、ほぼ中軸線に沿って存在することが判った。この段階で確認調査を終了し、各トレンチのセクション図作成を開始する。併行して、写真撮影も進めた。写真撮影にあたっては、土地所有者の方々のご好意により、撮影に邪魔になる立ち木を伐採して頂いた。



第61図 京塚古墳群・成島古墳群分布図



第62図 京塚古墳群 4号墳トレンチ配置図

11月26日(金)午前10時から現地説明会を開催し、地元の児童や関係者多数が来訪した。現地説明会終了後は、各トレンチや後円部の調査区を現況に復し今回の調査を終了した。

### 3 調査の成果

第62図に示したのが、今回トレンチを配置した箇所である。前方端部の中央部をAトレンチとし、墳籠線に沿って各トレンチを配置した。掘り下げは土色を観察しながら墳丘から流れ込んだ土砂を取り除く方法で行なった。第65図から68図は墳丘のセクション図である。

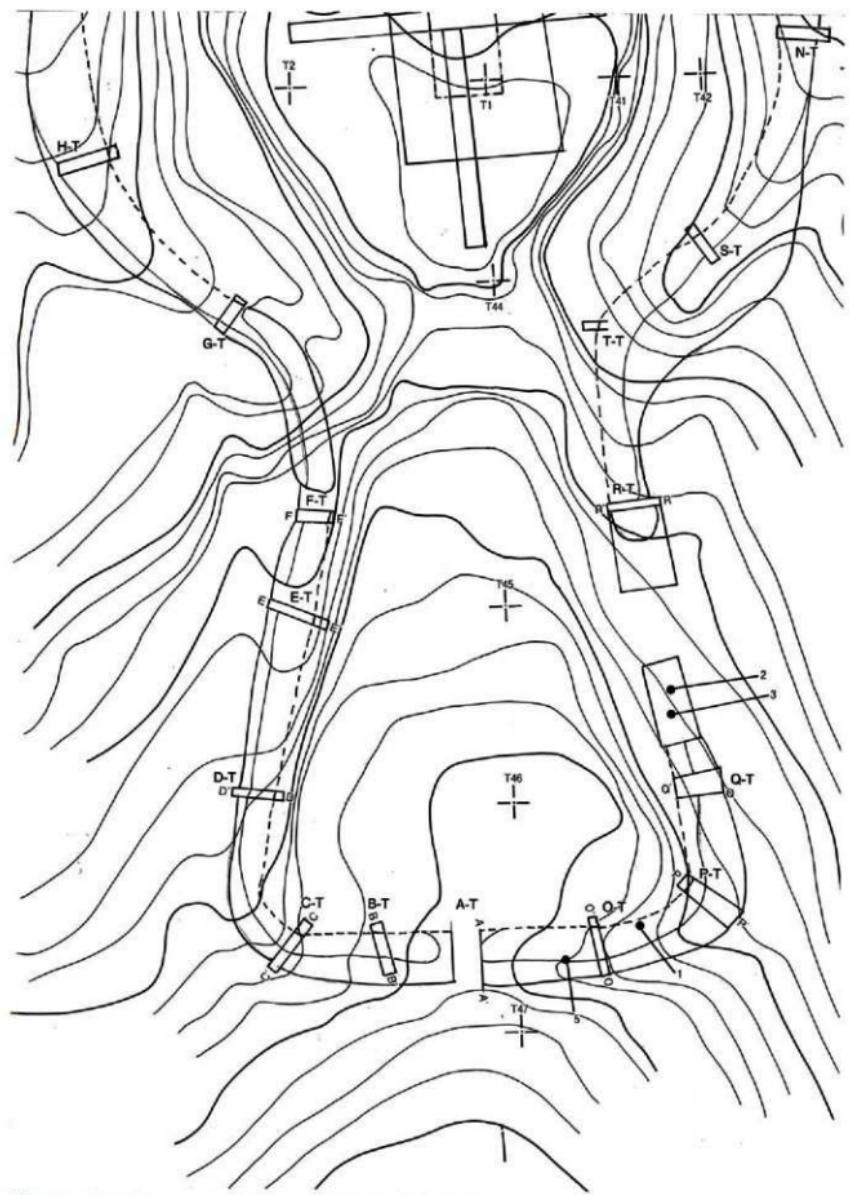
セクション図で示す様に、削平した前方端部の土砂を周溝に埋めたもので、大半が埋没していた。これは、山頂に通じる山道になっていることが原因の一つに上げられる。A・B各トレンチの覆土の大半に多量の炭や焼土を含み、明らかに人為的に周溝を埋め立てたことを示している。第63図で示す様にAトレンチとPトレンチの周溝壁面及び底面から土師器片が出土している。

特に第63図に示した1の地点からは、第70図1の土師器甕が出土している。1個体分がまとまっており、この位置に埋納されたものと考えられる。長年風雨にさらされた結果と思われる破片であり、図上復元しかできなかった。5は鉢形の器形を呈する土師器の口縁部片で内面にハケメ調整が認められる。他に内黒土師器坏の破片が周溝壁面から2点出土している。Aトレンチ西側のBからJまでの各トレンチからは遺物は認められなかった。

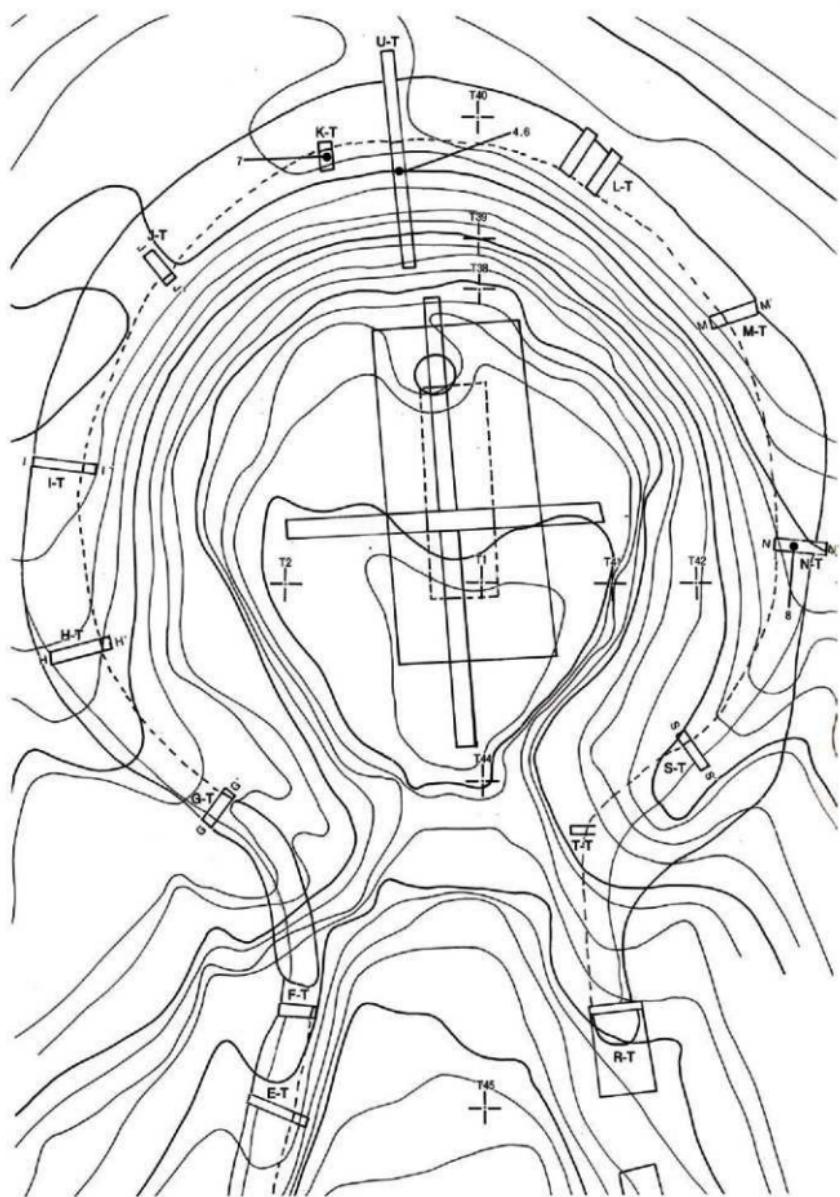
D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・Sのトレンチは、覆土が2層から3層と堆積土はいずれも浅い。共通しているのは底面に、少量の炭化物を含むことである。特にRトレンチでは、木材が炭化した状況でまとめて認められた。これは、古墳を構築する際にそれまで生えていた立ち木を、伐採して焼却したとの考えもある。KとNトレンチの覆土から7.8の須恵器甕片が出土している。

Tトレンチは木の根があり、掘り下げを断念した。ボーリング探査の結果覆土は最深で30cmある。Rトレンチは、西側よりも少し深い堆積状況を示す。風の吹く方向に関連があると想定される。Qトレンチの2と3からは、それぞれ1個体分の土師器甕片が出土している。第70図の2と3の底部である。器厚な底部だけが原形を留めているが、他の破片は程磨滅が著しい。墳丘から墳籠線さらに周庭までトレンチを配したUトレンチは、第67図で示す様に墳丘の盛土を確認した。セクションの1と2は墳丘からの流入土であり後円部にも周溝が認められた。3は仕上げに用いた土で赤褐色を有する。4~8は盛土であり、5と7は黄褐色6・4・8は赤褐色で交互に版築している。8の底面は地山であり6の上面から第70図の4と6の土師器手づくね土器が出土している。今回の出土遺物で復元できた土器である。

主体部は、後円部に配した十字のトレンチによって確認した。昨年調査を実施した6号墳と同様に、窓地になっている箇所は、木棺の腐食によって陥没したものと推測される。主体部は全体を確認したものではないが、概ね第69図で示した範囲が墓壙や棺を設置したと考えられる。一方、後円部の東端部に存在する窓地に関しては、上部からの多量の炭化物が認められることから、比較的新しい造構である可能性がある。



第63図 京塙古墳群4号墳トレンチ配置図前方部遺物出土点



第64図 京塚古墳群4号墳後円部遺物出土点

今回の確認された主体部で想定される墓壙の全長は10.3m、幅4.8mで、木棺直葬と推測される。木棺の規模は確認はしていないが、墓壙の大きさより長径6.5m、短径1m前後を設置していると考えられる。これらは、墳丘を構築した後に掘り込んでおり、6号墳の調査結果と類似する。

墳丘は各トレンチの成果から、全体の約3分の1が盛土であり、他は削り出して構築していることが確認された。後円部はUトレンチの成果から、1.5mの盛土が認められた。前方部査で算定された古墳の計測値は、主軸長が39.4m、後円部径21.4m、前方部長18.0m、前方部幅が13.2mである。後円部の高さ3m、前方部の高さは1.5mとなる。

周溝は、堆積土を除けば、測量で得た数値と大差はなかった。堆積土の深さは、20~40cmであり、くびれ部付近が最深を呈していた。幅は1~3mで、基本的に全周する。

#### 4 出土遺物

今回の京塚4号墳から出土した遺物は、周溝や墳丘を中心に縄文時代の石器片6点、古墳時代の土師器片371点、奈良時代の須恵器片6点、近世の陶磁器片6点・古錢3点であった。出土した土師器は、破片によるものが大半で、壺片を中心に塊（坏）と手づくね土器が僅かにみられる。いずれも磨滅が著しく、明瞭な器形や調整手法を判断することは困難であった。その点を考慮して、列挙した順に述べる。

##### ○縄文時代の石器（第70図9）

図示した尖頭器1点と剥片5点が、出土している。縄文土器片が出土していないことから年代は特定できないが、尖頭器の形態から縄文早期から前期に位置づけたい。出土状況から古墳の構築の際に盛土に混入したものと考えられる。

##### ○古墳時代の遺物（第70図1~6）

###### 1) 土師器壺形土器（第70図1~3）

底部に木葉痕を残す厚底の壺形土器で、外反する口縁部に球形もしくは卵型の胴部が伴っている。調整は、外面を細かなハケメ調整を施すものとミガキを加えた二種類が存在する。内面は、ハケメとヘラ調整で仕上げている。同様な壺形土器は、米沢市の八幡塚古墳、上浅川遺跡、上新田A遺跡、川西町の龍藏北遺跡などから出土しており、5世紀から6世紀前半の特徴を示している。

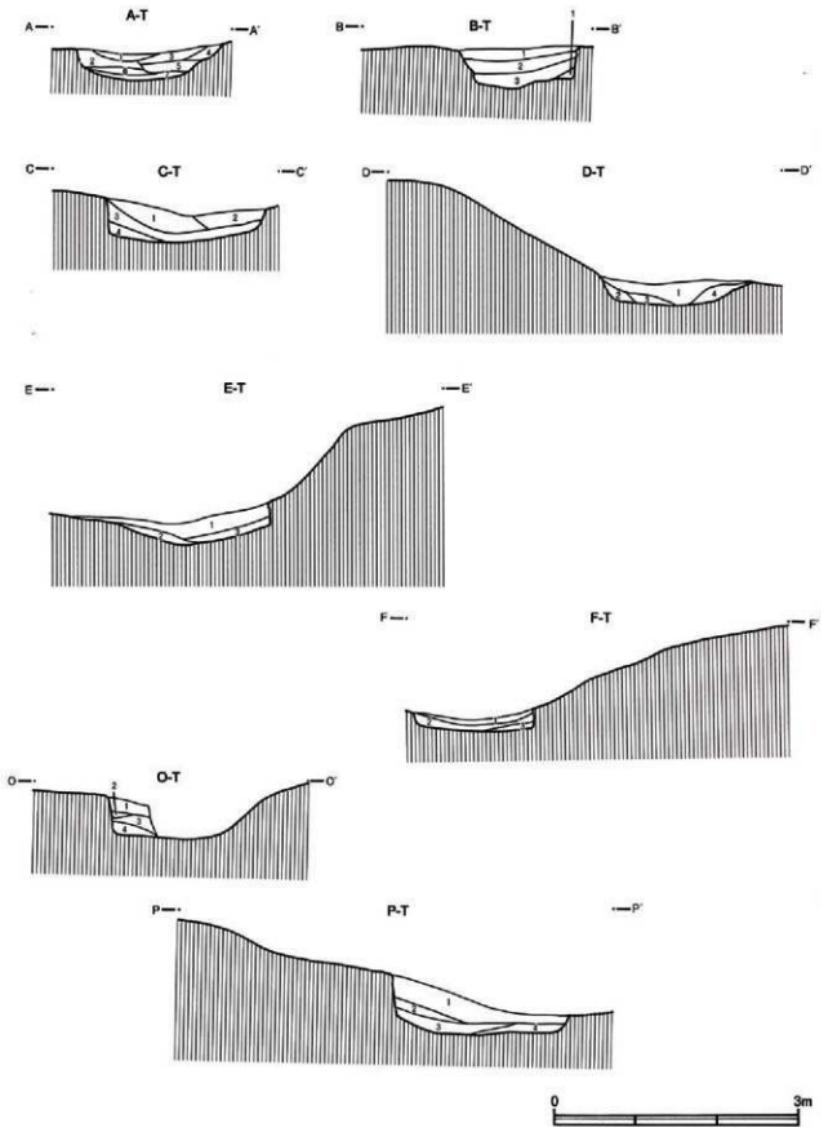
###### 2) 土師器鉢形土器（第70図5）

口縁部片の出土であり、全体の器形は不明であるが丸底を示すものと考えている。外面には輪積みのあとが残り、内面はハケメ調整を施している。瓶と推測した。

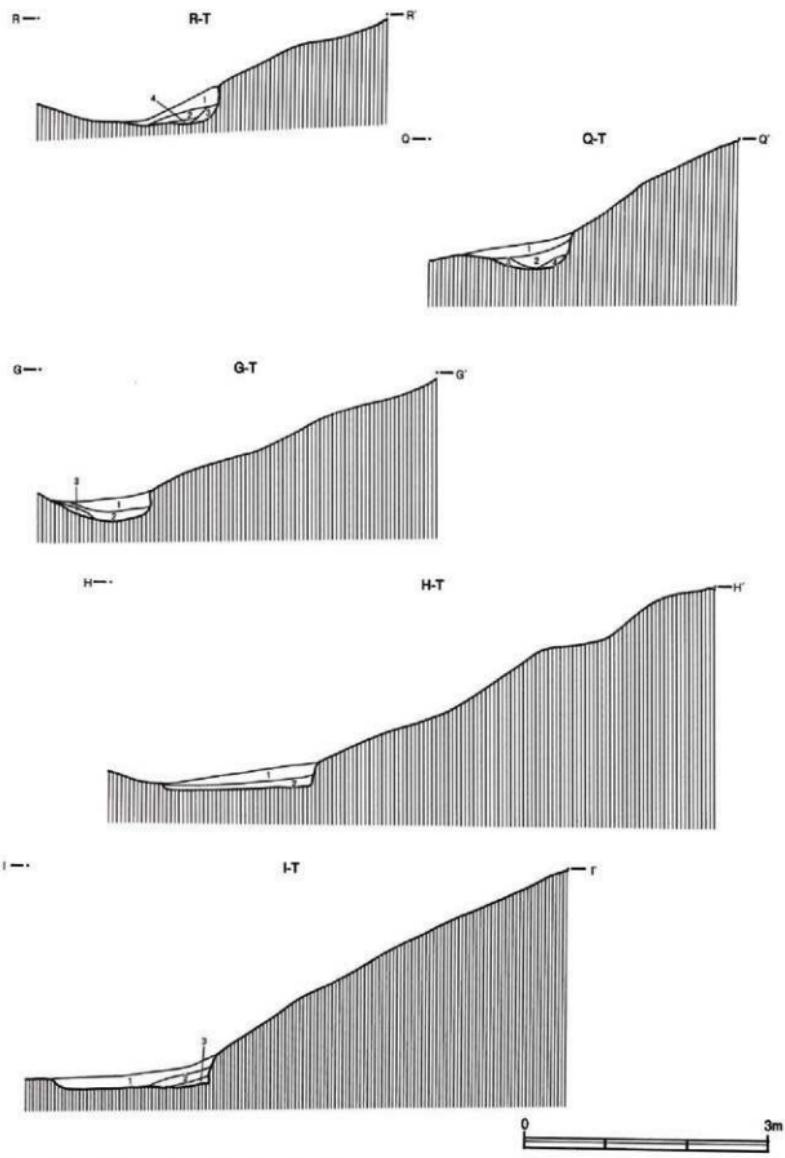
###### 3) 手づくね土器（第70図4・6）

坏形を呈する手づくね土器として、2点出土している。唯一復元できた坏が、4と6であり6は底部が欠損している。4は完形に近い土器で、内湾する口縁部が底部に向かう浅い器高が特徴である。底部には、木葉痕が認められた。内面底部に放射状のミガキが観察された。

6は4よりもさらに低い器形であり、外面に指圧の調整痕を有する手づくね土器である。



第65図 京塚古墳群4号墳トレンチセクション図(1)



第66図 京塚古墳群4号墳トレンチセクション図(2)

図示した2点とも、古墳に関連する祭祀遺物として供えられたものと考えられる。同様な遺物は、上新田A遺跡から出土している。

○奈良時代の遺物（第70図7・8）

1) 須恵器壺形土器

7は蒸道具として、使用された痕跡をもつ。8は須恵器壺の底部で横位のケズリ調整を施している。図示しなかった他の4点も全て須恵器壺の胴部破片であり、墳丘表土や墳麓線の腐食土からの出土であることから後世の段階で混入したものであろう。

2) 内黒土師器

図示しなかったが、2点出土している。壺であり底部ヘラ切りを示す8世紀末頃の内黒土師器壺である。これらの奈良時代において当地が、再利用されたことを示すものである。

○近世の遺物

陶磁器と古銭が出土している。陶磁器は皿や茶碗の日用品であり、古墳で宴会等をしたときに廃棄されたものと考えられる。古銭は「寛永通宝」である。陶磁器の染付け文様からすれば幕末から明治にかけての遺物であろう。雪が解けた春に「遊山」と称する行事があった。見通しの良い平坦な場所で行われることから、古墳の墳丘が選ばれたものと考えられる。

## 5まとめ

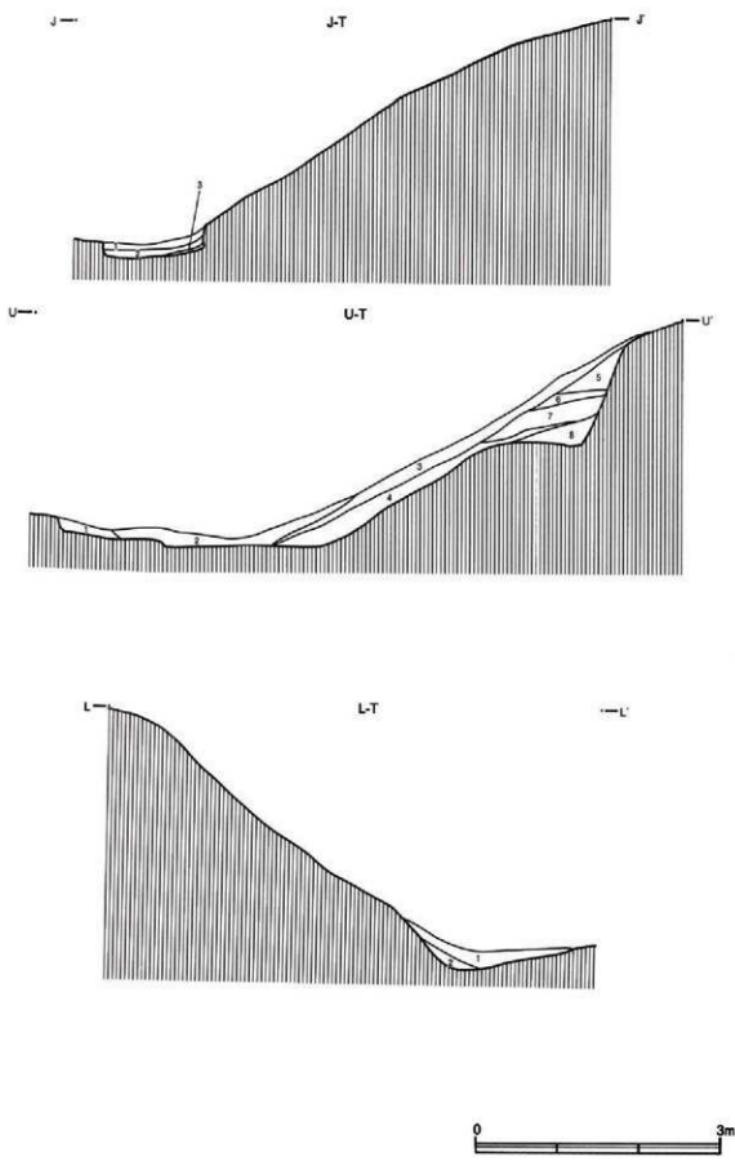
今回の京塚4号墳調査で確認された成果は、山形県の古墳研究にとってあらたな一項を付け加えたものと思われる。置賜地方の古墳時代の課題を提起しながら要約し、まとめとしたい。

1) 古墳の年代

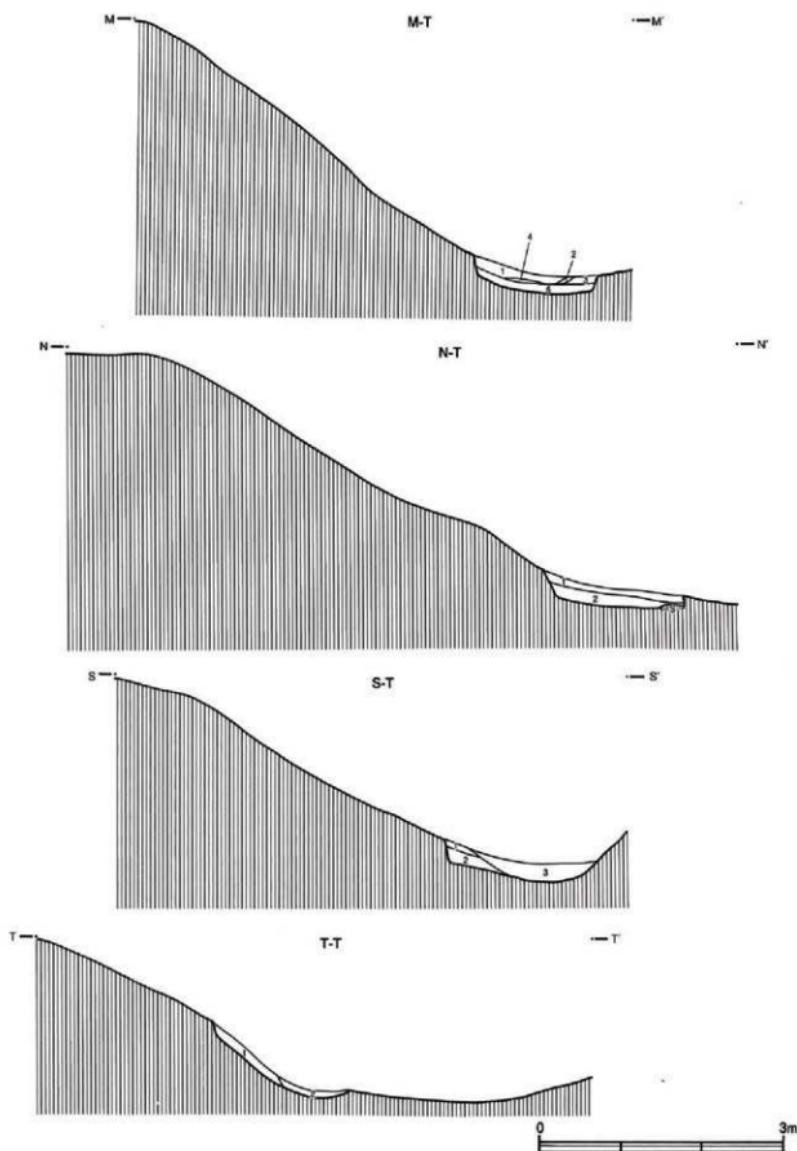
京塚古墳の年代については、成島古墳群と比較しながら論じられてきた。成島古墳群に先行して成立したとの考え方と成島古墳群に後続する古墳との見方であった。今回京塚4号墳から出土した土師器壺の特徴は、少なくとも6世紀前半代の後期古墳に求められるもので、4世紀末から5世紀前半に成立した成島古墳群の後に構築されたことが判る。成島古墳群と京塚古墳群の関連については、今後の検討を必要とするが、成島1号墳の前方後円墳に伴う周辺古墳が方墳であるのに対し、京塚4号墳に伴う古墳は円墳で構成されており、方墳から円墳に移行することを示唆している。

2) 山形県の前方後円墳

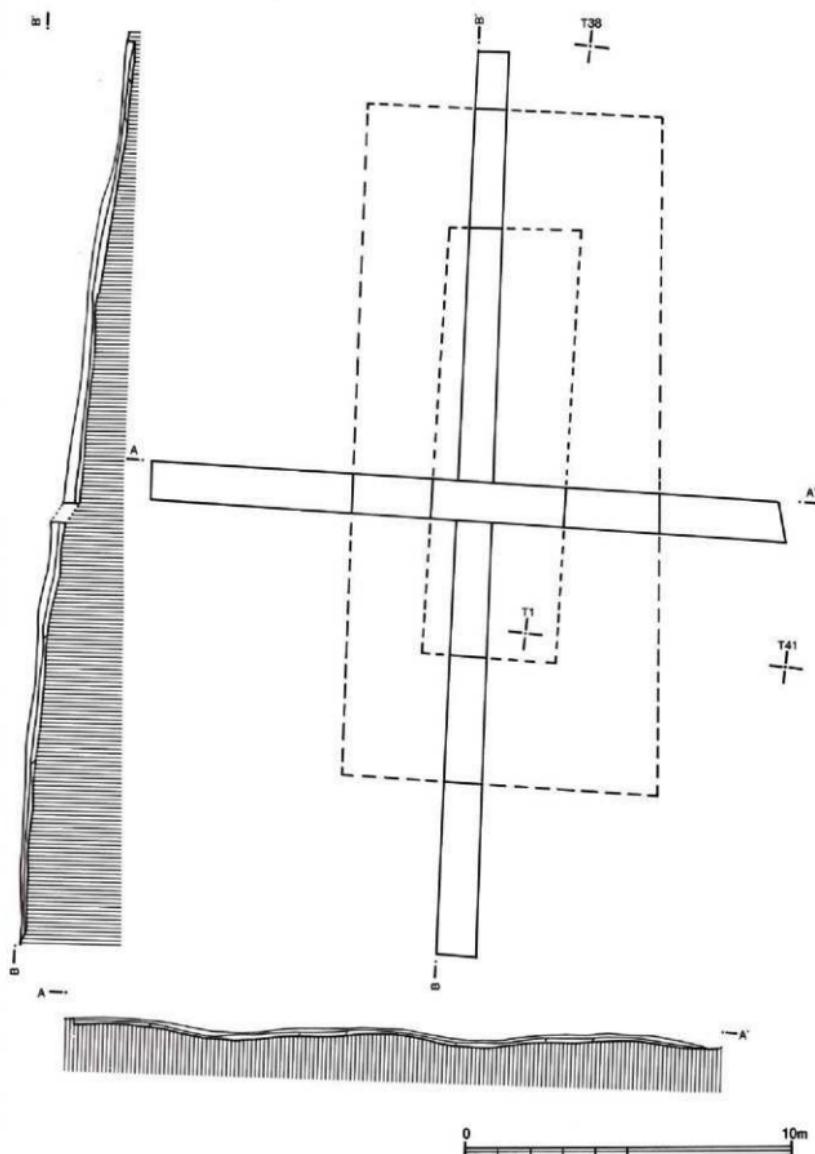
山形県内の前方後円墳・前方後方墳は、現在36基を数える。このうち前方後円墳は28基で、26基の古墳が置賜地区に集中している。最大の前方後円墳は南陽市の稻荷森古墳で全長96m、次に成島1号墳の58.7m、戸塚山139号墳の54mとなる。そして京塚4号墳が続くことになる。注目されるのは、4世紀代の稻荷森古墳と成島1号墳が三段構築、5世紀の戸塚山139号墳が二段構築に対し、京塚4号墳以降の前方後円墳は何れも無段構築で、40m以内の小規模古墳で占められることである。首長だけの特権であった前方後円墳が多様化され、下小松古墳群の様



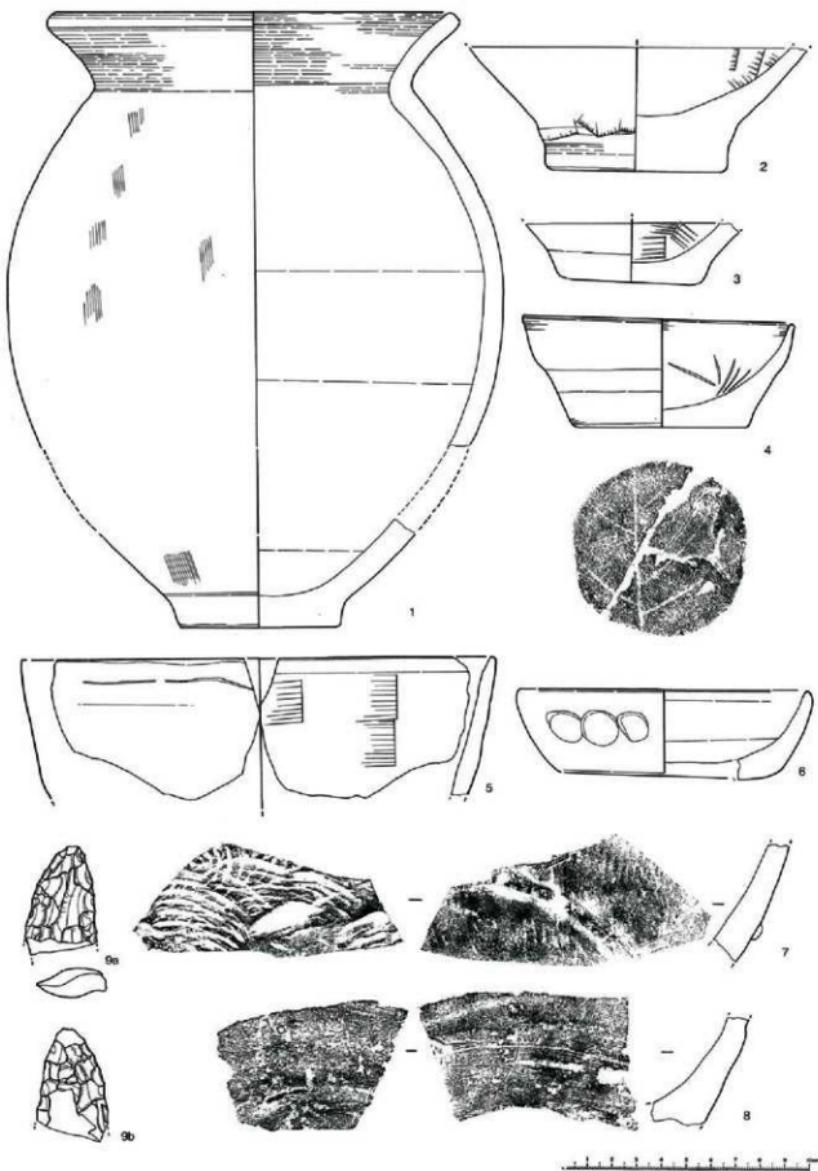
第67図 京塚古墳群4号墳トレンチセクション図(3)



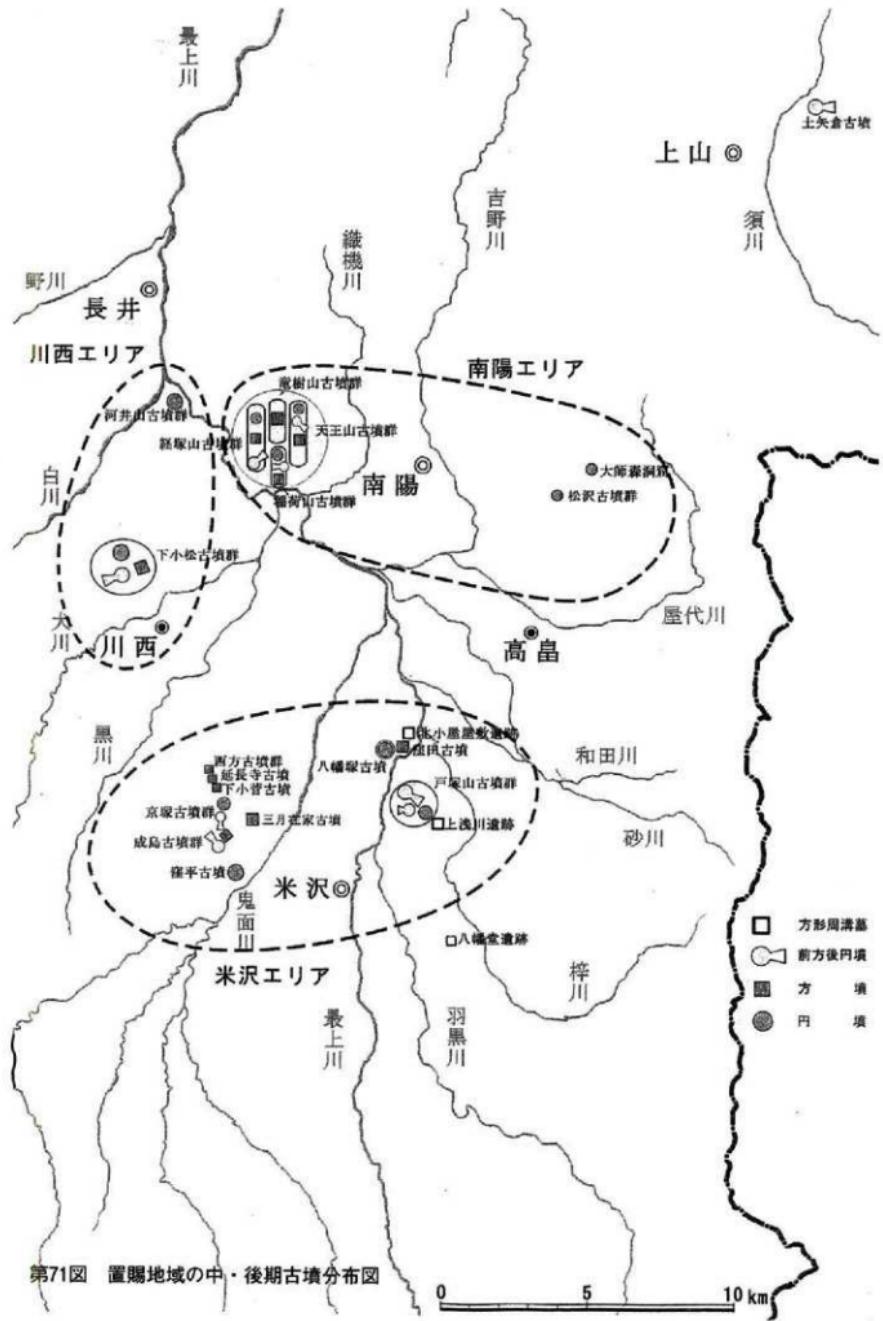
第68図 京塚古墳群4号墳トレンチセクション図(4)



第69図 京塚古墳群 4号墳主体部トレンチセクション図

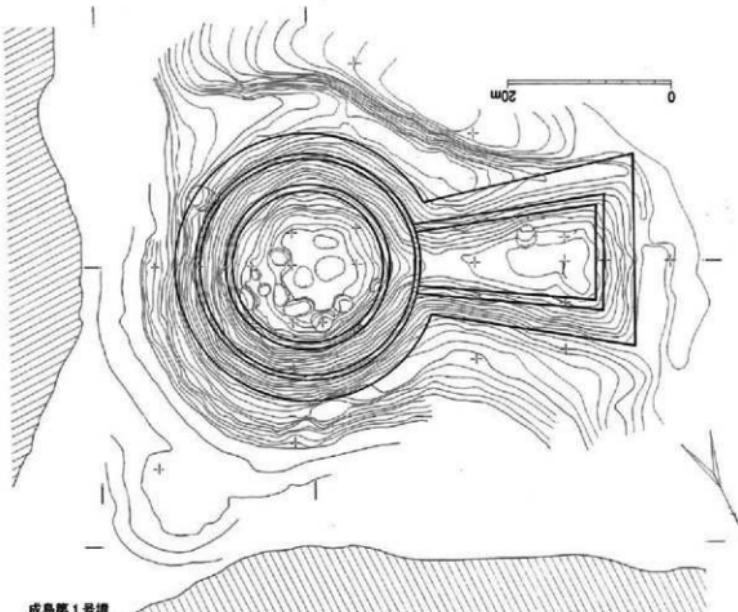


第70図 京塚古墳群4号墳出土遺物実測図

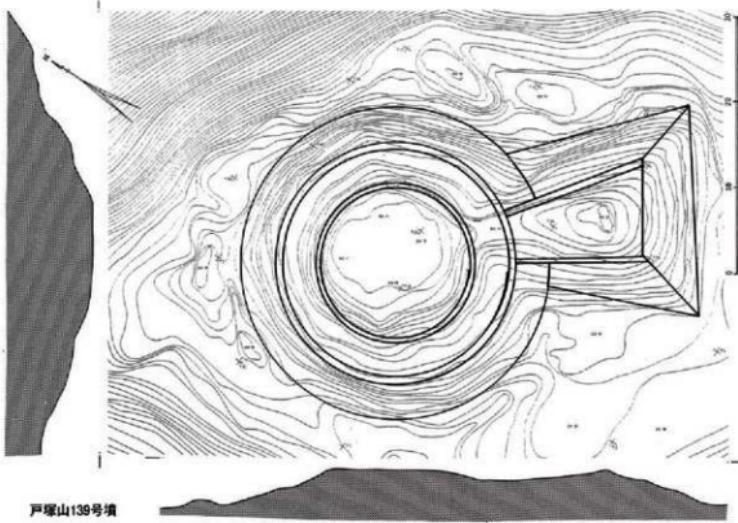


第71図 置賜地域の中・後期古墳分布図

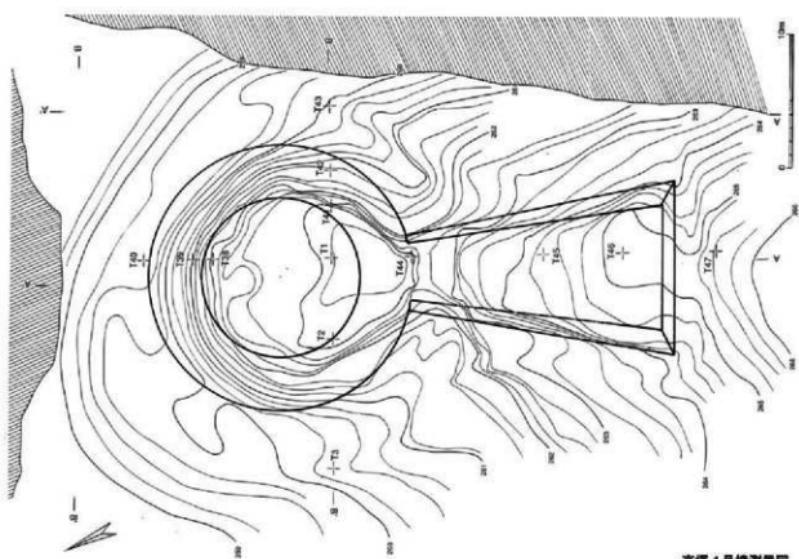
(2004 手塚に加筆修正)



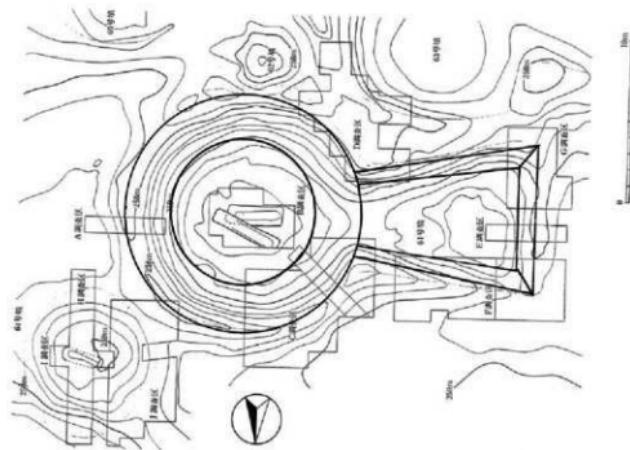
成島第1号墳



第72図 成島1号墳・戸塚山139号墳設定企画概念図(1)



京塚4号墳測量図



小森山61号墳

第73図 京塚4号墳・小森山61号墳設定企画概念図(2)

に複数連立することになる。こうした背景のなかで、京塚4号墳も成立したもので、下小松古墳群との関連について注目したい。

### 3) 古墳時代中・後期の置賜地区

置賜地区的古墳文化は4世紀前半に成立し、やがて4世紀の後半に入ると地域の集団を統一した首長が登場するようになってくる。米沢市の寶領塚古墳、南陽市の稻荷森古墳、川西町の天神森古墳の被葬者たちである。

置賜地域をほぼ3区分するように成立した政治基盤は、次の中期・後期古墳で明確になってくる。置賜地域の中期古墳と後期古墳の分布を示したのが第71図である。これによると京塚古墳群は、米沢市東部の戸塚山古墳群とともに米沢エリアの範囲内に加わっているが、西側の川西町下小松群を母体とした川西エリアに入る考え方もある。北側には、南陽市の経塚・稻荷山・龍樹山・天王山古墳群を主体とした南陽エリアが存在している。

こうしたエリアは、当時の政治基盤を反映するもので、米沢・川西・南陽の支配区分が確立していた様子を示している。5世紀になると明確に、最上川を境に東の戸塚山古墳群を主体とした集団と西側の成島古墳群を主体とした集団に分かれていった。そして、6世紀になると成島古墳群の首長から京塚古墳群の被葬者に政権が移行し、その内で優位に立った首長が今回調査を実施した京塚4号墳と考えられる。

最後に墳丘形態について述べる。第72・73図に示したのは測量図に基づいて作成した企画設定概念図であり、古墳時代前期の成島1号墳の墳丘形態から中期の戸塚山139号墳を経て後期古墳の京塚4号墳、小森山61号墳等に変容していく様相が明らかになった。この変容の背景にある事項を解明することにより、置賜地方に於ける古墳時代の研究が発展するものと考えられる。今回の調査にあたり、ご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

### 参考文献

- 1994 東京堂出版 大塚初重 小林三郎 編 山形県川西町下小松古墳群（1）
- 1995 米沢市教育委員会 米沢市埋蔵文化財報告書第47集（遺跡詳細分布調査報告書第8集）
- 1998 米沢市教育委員会 米沢市埋蔵文化財報告書第61集（遺跡詳細分布調査報告書第11集）
- 1999 米沢市教育委員会 米沢市埋蔵文化財報告書第65集（遺跡詳細分布調査報告書第12集）
- 2003 米沢市教育委員会 米沢市埋蔵文化財報告書第80集（遺跡詳細分布調査報告書第16集）
- 2004 米沢市教育委員会 米沢市埋蔵文化財報告書第84集（遺跡詳細分布調査報告書第17集）

第4表 置賜地域の古墳編年表

年	米 沢 周 辺	川西町周辺	南陽市・高畠町周辺
200			
300	<ul style="list-style-type: none"> <li>■比丘尼方形周溝墓</li> <li>■大清水方形周溝墓</li> <li>■横山2号墳</li> <li>■横山1号墳</li> <li>■寶鏡塚 ●大西円形周溝墓</li> <li>戸塚山195号墳 ■木和田西</li> <li>成島1号墳 ■延長寺</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■雁境塚</li> <li>■天神森</li> <li>●栗跡沢143号墳</li> <li>↓</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>蒲生田3号・4号墳</li> <li>経塚山6号墳・龍樹山17号墳</li> <li>↓</li> <li>蒲生田2号墳</li> <li>稻荷森</li> </ul>
400	<ul style="list-style-type: none"> <li>■成島2号墳 ■西方古墳群</li> <li>■三月在家 ■戸塚山182号墳</li> <li>●八幡塚</li> <li>■戸塚山140号墳</li> <li>戸塚山139号墳</li> <li>●戸塚山137号墳 ●崖平</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>↓</li> <li>■下小松61号墳</li> <li>↓</li> <li>■下小松65号墳</li> <li>↓</li> <li>↓</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■経塚山・稻荷山・天王山</li> <li>↓</li> <li>●経塚山・龍樹山・稻荷山・天王山</li> <li>↓</li> <li>稻荷山・天王山</li> <li>↓</li> </ul>
500	<ul style="list-style-type: none"> <li>●戸塚山138号墳</li> <li>●京塚4号墳</li> <li>●戸塚山181号・179号墳</li> <li>■崖田</li> <li>■戸塚山34号墳</li> <li>●戸塚山177号墳</li> <li>●戸塚山180号墳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>↓</li> <li>■下小松40号墳</li> <li>↓</li> <li>■下小松98号墳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■経塚山2号墳</li> <li>●松沢1号・2号墳</li> <li>↓</li> </ul>
600	<ul style="list-style-type: none"> <li>■戸塚山189号墳</li> <li>■戸塚山175号墳</li> <li>●戸塚山74号墳</li> <li>●戸塚山43号墳</li> <li>■戸塚山59号墳</li> <li>●戸塚山177号墳</li> <li>●戸塚山168号墳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●長手2号墳</li> <li>●天神裏</li> <li>●木和田</li> <li>●長手4号墳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●羽山</li> <li>●二色塚1号墳</li> <li>●清水前</li> <li>↓</li> <li>●蒲生田1号墳</li> <li>●安久津1号・2号墳</li> <li>↓</li> <li>●金原</li> <li>↓</li> </ul>
700	↓	●牛森	

\* = 調査古墳

(2004 手塚に加筆修正)

第5表 山形県の前方後円(方)墳一覧表

No	古墳名	所在地	形態	主軸長	後円径(方)	御溝(方)	前方長	前方幅	前方高
1	稚荷森古墳	南陽市大字長岡	前方後円	96.0	64.0	9.6	32.0	32.0	4.8
2	寶鏡塚古墳	米沢市蘆田町蘆田	前方後方	(80.0)	40.0	4.8	40.0	(50.0)	-
3	天神森古墳	川西町大字下小松	前方後方	75.6	48.3	4.2	32.5	32.5	3.0
4	成島1号墳	米沢市広幡町成島	前方後円	58.7	32.5	5.1	26.2	22.4	3.65
5	戸塚山139号墳	米沢市大字浅川	前方後円	54.0	36.0	4.5	18.0	24.0	4.0
6	東根大塚古墳	東根市大字本郷	前方後方	(50.0)	30.0	35m以上	(21.0)	-	-
7	京塚4号墳	米沢市広幡町上小菅	前方後円	39.4	21.4	3.0	18.0	13.2	1.5
8	小森山78号墳	川西町大字下小松	前方後円	35.0	20.0	2.1	9.3	9.2	2.1
9	蒲生田山3号墳	南陽市大字上野	前方後方	34.0	18.4	1m以上	12.0	11.0	1m以上
10	蒲生田山4号墳	南陽市大字上野	前方後方	33.0	16.0	1m以上	13.0	11.0	1m以上
11	蒲生田山2号墳	南陽市大字上野	前方後円	(30.0)	-	-	-	-	-
12	竜樹山17号墳	南陽市大字梨郷	前方後方	(30.0)	-	-	-	-	-
13	経塚山6号墳	南陽市大字梨郷	前方後方	30.0	19.5	2.3	12.5	10.0	1.2
14	経塚山2号墳	南陽市大字梨郷	帆立貝式	30.0	16.2	-	-	-	-
15	小森山61号墳	川西町大字下小松	前方後円	28.0	15.0	(1.46)	11.36	10.3	1.69
16	八幡塚古墳	米沢市蘆田町蘆田	前方後円	27.6	24.0	3.26	3.0	9.0	1.5
17	小森山98号墳	川西町大字下小松	前方後円	26.5	17.5	3.5	12.0	6.5	1.5
18	坊主塚1号墳	山辺町大字大寺	前方後円	26.5	17.5	1.95	9.0	(16.0)	1.05
19	小森山67号墳	川西町大字下小松	前方後円	24.5	13.5	-	11.0	8.0	-
20	京塚山9号墳	南陽市大字梨郷	前方後円	24.0	13.7	-	10.3	-	-
21	戸塚山137号墳	米沢市大字浅川	帆立貝式	24.0	21.0	2.8	3.0	9.0	1.5
22	小森山50号墳	川西町大字下小松	前方後円	23.5	13.0	-	9.5	6.5	-
23	小森山69号墳	川西町大字下小松	前方後円	23.0	13.0	-	8.5	8.0	-
24	小森山75号墳	川西町大字下小松	前方後円	23.0	13.0	-	9.0	10.0	-
25	小森山30号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.5	12.3	-	7.5	6.0	-
26	小森山65号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.5	14.5	2.1	9.3	9.2	2.1
27	小森山73号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.0	13.5	-	8.0	7.0	-
28	小森山100号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.0	7.5	3.0	9.0	5.0	2.0
29	小森山58号墳	川西町大字下小松	前方後円	21.5	13.5	-	7.5	5.0	-
30	小森山87号墳	川西町大字下小松	前方後円	21.0	13.0	-	8.0	5.3	-
31	小森山62号墳	川西町大字下小松	前方後円	21.0	13.0	-	6.5	7.0	-
32	小森山53号墳	川西町大字下小松	前方後円	19.5	10.5	-	6.5	7.0	-
33	小森山48号墳	川西町大字下小松	前方後円	17.5	12.3	-	7.5	6.0	-
34	土矢倉2号墳	上山市大字金谷	前方後円	17.0	10.7	(4.0)	7.3	(13.5)	(3.5)
35	戸塚山138号墳	米沢市大字浅川	帆立貝式	15.0	13.5	(1.5)	1.5	6.0	0.75
36	戸塚山195号墳	米沢市大字浅川	前方後円	15.5	9.5	1.5	5.5	9.5	2.0

注= ( ) の数字は推定長・-は未確認。

## 第V節 古館山古墳確認調査

### 1 遺跡付近の環境と概要

本古墳は市街地から北東約4kmに位置し、標高370m古館山頂上から西側に延びる尾根の南斜面の山麓、標高約250mの大字長手字古館山3800-1に所在する。古墳付近の環境は、第図で示すように、古館山から西側に延びる丘陵の西側突端部の頂上及び西側斜面には、横穴式の終末期古墳群や中世の館跡等が隣接して広範囲に分布している。

古墳北西側から、山城と平城から構成される「長手館跡」。古墳の形態が円墳で、横穴式古墳9基から構成する「長手古墳群(終末期)」。土壘・曲輪・水手曲輪・溝等が確認されている「長手居館跡」。また、南側1.5kmには「横山古墳」が存在する。横山古墳は平成9年度の当市遺跡地図によると、旧木和田塚bと登録されている2基の方形塚は、平成11年度の発掘調査により発生期古墳(4世紀中葉)と判明したこと、字名から横山古墳と改名した。一方、古館山古墳の規模は墳籠で1号墳が東西13m・南北13.5m、2号墳が東西4.8m・南北6.8m、を測る。同様に3基の方形塚が確認される「木和田塚a」が隣接して存在する。当古墳、東側300m、標高約330mには「古郷部館跡」。この古郷部館跡の南西側200mには櫓台・階段状テラスが構成される「堂ヶ島館跡」等が存在しており、古墳が遺存する大字長手・字木和田地区には、古墳時代前期から終末期までの古墳が確認されることで、古墳時代の系譜を研究する上で貴重な資料である。

### 2 調査の経過

調査の発端は、米沢市産業部農林課林務係から本教育委員会に、農林関係事業の「山形県里山景観創生事業(松くい虫被害木抜倒処理)」が実施されることの報告を受けた。本事業の詳細は、松くい虫によって受けた枯松が景観を損ねることや、松の被害の拡大を抑制する目的から、被害を受けた枯松を伐採することであった。報告を受けた教育委員会は、当該地付近には前述のとおり、10箇所余りの古墳群や館跡等が分布していることを鑑み、伐採される倒木によって、遺存している古墳や館跡等の遺構に影響を及ぼす恐れがあることから、林務係に事業計画や、現地で具体的かつ詳細な作業手順を公聴した。また、遺構が存在している位置をテープ等で目印をして伐採担当者に確認し、枯松の伐採作業によって遺構が破壊される恐れがある所については、充分に注意を払って実施するよう指示した。

教育委員会は遺跡包蔵地以外の空白地にも、未確認の遺跡がある可能性を考慮し、一帯空白地の遺跡確認の踏査を数回実地した。今回の踏査によって、2基の古墳を確認した。西側に確認された古墳を古館山1号墳、東側に確認できた古墳を古館山2号墳と命名した。1号墳は、丘陵から緩やかに張り出した裾部に位置する。形態は円墳で、径約10m、高さ約2mを測る。形態はいわゆる山寄せ式である。古館山2号墳も1号墳同様、裾部に位置した円墳で、径約8mマウンドの高さ約1.5mを測る。1号・2号墳は前述のように、丘陵から入江状に張り出した裾部に位置し、東西に約80m距離をおいて対象的に確認され、規模も同様であることから、時期差はないものと推測される。本市で確認されている古墳と照合した場合、長手古墳と同様な終末期古墳と判断される。



第74図 古館山古墳周辺位置図 (S=1/10,000)

# 報告書抄録

ふりがな	いせきしうきいぶんぶちょうきほうくしょ							
書名	遺跡詳細分布調査報告書							
副書名								
卷次	第18集							
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第87集							
編著者名	菊地政信・月山隆弘							
編集機関	米沢市教育委員会							
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1-55号 TEL (0238) 22-5111							
発行年月日	2005年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
館山C	山形県米沢市 館山6丁目 ほか 1539-1外	6202	米沢市 遺跡番号 G-149	37度 54分 35秒	140度 4分 19秒	20040510 20040521	76m <sup>2</sup>	個人住宅
米沢城跡	山形県米沢市 丸の内1丁目	6202	米沢市 遺跡番号 G-304	37度 53分 48秒	140度 7分 44秒	20041121 20041126	350m <sup>2</sup>	公園参道
京塚古墳群	山形県米沢市 広幡町成島上 小菅地内	6202	米沢市 遺跡番号 I-659	37度 56分 28秒	140度 4分 33秒	20041101 20041130	835m <sup>2</sup>	確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
館山C	集落跡	縄文・中世	ピット・土壙	縄文土器・石器				
米沢城跡	中世	14世紀～ 19世紀	配石遺構	礫(河原石)				
京塚古墳群	古墳	5世紀末～ 6世紀初期	木棺直葬	石器・土師器・	後円部の中央に木棺直葬のプラン確認			

# 写真図版





▲発掘前の風景（南東から）



▲遺構全景（西方から）



▲FY 1近景（北方から）



▲FY 7セクション状況（北方から）



▲TY1半裁状況（南方から）



▲TY33半裁状況（東南から）



▲TY3半裁状況（南方から）



▲ T Y18半裁状況



▲ T Y6半裁状況（南方から）



▲ T Y17半裁状況（東方から）



▲遺構全景（東方から）



▲DY 2 セクション状況（北方から）



▲出土遺物（摺鉢 4 点左・内耳土壺 3 点右）



▲配石遺構（南方から）



▲配石遺構（南西から）



▲京塚4号墳全景（前方部から望む）



▲後円部の南東地区調査風景（南東から）



▲A トレンチセクション状況（西方から）



▲E トレンチセクション状況



▲ I トレンチ掘り下げ状況・右が壇丘



▲前方部西端部C トレンチ掘り下げ状況（西南方から）



▲G トレンチセクション状況（西方から）



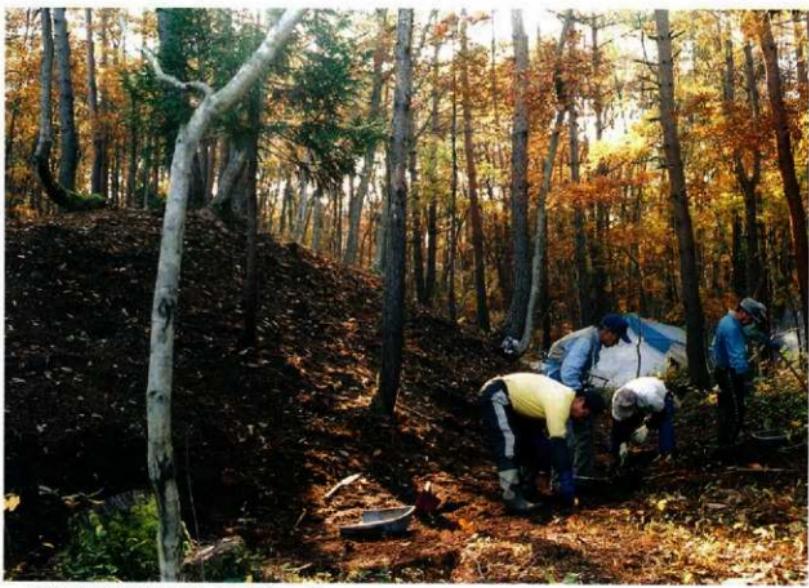
▲F トレンチセクション状況（南西方から）



▲後円部墳丘（北西方向から）



▲M・L トレンチ（南東から望む・左が墳丘）



▲後円部西側調査風景（北東方から）



▲I トレンチ掘り下げ状況（右側が墳丘・南東方から）



▲ S トレンチ掘り下げ状況・右側が壇丘（南東方から）



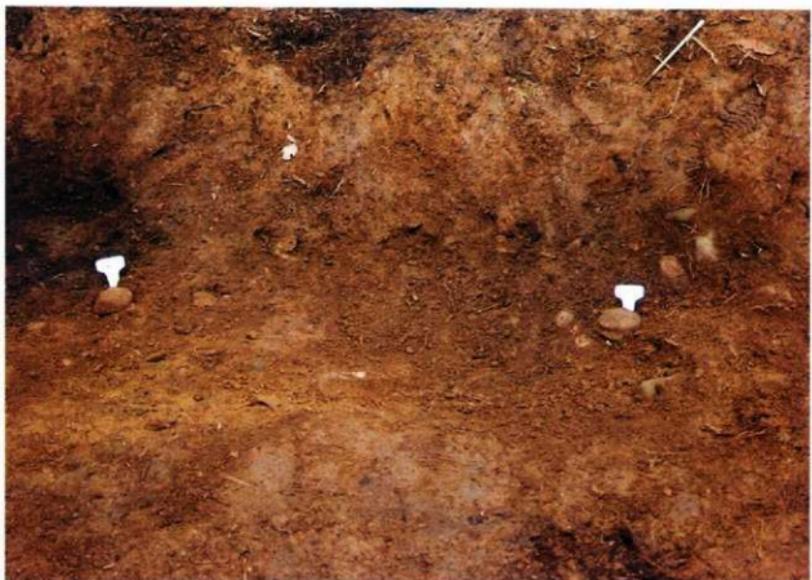
▲ J トレンチ掘り下げ状況・右側が壇丘



▲前端部トレンチ遺物出土状況遠景（東方から）



▲同上近景（第70図1）



▲ Q トレンチ調査区遺物出土状況・第70図2が右・3が左（東方から）



▲ R トレンチ整地層出土の炭化物（東方から）



▲Uトレンチ掘り下げ状況遠景（北方から）



▲Uトレンチ近景（赤褐色が版築層で黄褐色は地山の土色（北方から）



▲Uトレンチ遺物出土状況（北方から）



▲Uトレンチ遺物出土状況近景（北方から）27・27Bは同一片・第70図4の杯



1



2



3



4



5



6a



8



6b



7



9

▲ 1～5 鎧山C・6 a～9 京塚古墳群4号墳



米沢市埋蔵文化財調査報告書第87集  
**遺跡詳細分布調査報告書 第18集**

平成17年3月20日 印刷  
平成17年3月31日 発行

発 行 米沢市教育委員会  
米沢市金池三丁目1-55  
TEL (0238) 22-5111(内線7504)

印 刷 株青葉堂印刷  
米沢市下花沢3丁目8-50  
TEL (0238) 21-2366